【史料紹介】　高元泰『養生編』の研究―解題・校勘・影印―

賈　光佐

はじめに

『養生編』について、すでに拙稿「独立性易から貝原益軒までの日中養生文化の架け橋：高元泰の『養生編』について」（『日本思想史研究』（第五四号）、東北大学大学院文学研究科日本思想史研究室、二〇二二）において、京都大学附属図書館富士川文庫蔵高元泰『養生論』（以下、「京本」と略称する）、東京大学附属図書館鶚軒文庫蔵『高元泰養生訓』（以下、「東本」と略称する）、慶應大学幸田文庫所蔵髙玄岱［深見天漪］述『養生編』（以下、「慶本」と略称する）という三つの写本を収集して、各写本について書誌学的に考察した。さらに、その内容は独立が吉川広嘉（一六二一―一六七九）を治療した方法をまとめたものでありながら、貝原益軒の養生学の源流にもなるという、思想史的位置付けを試みた[一]。各写本の書誌を含め、拙稿で考察した事項は、ここで省略する。

さて、『養生編』が成立した経緯について説明する。高元泰（一六四九―一七二二）[二]は独立性易（一五九六―一六七二）に師事して、書道・篆刻・言語・医学などを習得した[三]。元泰が習った医学の知識は、風早家の祖、風早実種（一六三二―一七一一）に評価されて、実種が元泰を後西天皇（一六三八―一六八五）に推薦した。『養生編』は、元泰が後西天皇に「摂養之方」を尋ねられたため書いた著述である[四]。

『養生編』の成立した経緯からは、それは当時の公卿、ないし天皇に重視されて、江戸前期曹洞宗の僧侶、独庵玄光（一六三〇―一六九八）の跋文からも、彼も『養生編』を高評していることがうかがえる。その内容からは、当時中国最先端の養生学を日本で広める功績も無視できない。『養生編』の流布を鑑みれば、その重要性は一層明白に理解できる。慶本は書写の経緯と時期が最も明白な写本であるため、慶本から検討しよう。

慶本の跋文によれば、それは元来伴大受の蔵書で、嘉永五（一八五二）に書き写されたものである。そして、慶本の蔵書者の一人、中川徳基（一八三三-一九一五）がその『蔵書目録』でかつて『硯海餘波』で見たと記している[五]。『硯海餘波』は安政五（一八五八）年頃に編纂されたものであることから、慶本はそこから抄録したものであることがわかる。そして、京本と東本はそれぞれ日本近代著名な医学者、富士川遊（一八六五-一九四〇）と土肥慶蔵（一八六六-一九三一）の蔵書であることも、その価値がわかるであろう。

にもかかわらず、『養生編』については、拙稿以外にはほとんど研究されずにいた。そこで、向後の研究利用に備えるため、本稿では、諸本の異同を考察した上で、校訂本文を整定する。参考のため、影印は文末に付す。

凡例

一、利用する資料について

1．底本と校合本について、拙稿の、京本は本来の姿に近いもので、東本は京本とは異なる系統に属するものであるが、慶本は両者を折衷した清書本であるという結論に基づいて、京本を底本として選定し、東本と慶本を校合本にして適宜参考する。

2．各写本の構成に異同があることは、拙稿で明らかにした。序文について、京本と東本には、共通的に元泰によって書かれたものがあるが、慶本には独自の序文を有し、それぞれ「元泰自序」と「慶本序文」と呼ぶ。本文については、京本と慶本とは、共通的に三十二項目あるが、東本は二十八項目とし、また項目の合弁、順番の移動がある。跋文について、京本と慶本とは、共通的に独庵玄光が書いた跋文があるが、慶本は慶本の成立について記述する、独自の跋文を有し、それぞれ「玄光跋文」と「慶本跋本」と呼ぶ。

3．翻刻と影印は「諸本表紙」・「元泰自序」・「慶本序文」・「本文三二項目」・「玄光跋文」・「慶本跋本」という順番で作業する。影印は、底本にあるものは、底本の画像を掲載し、慶本独自のものは、慶本の画像を掲載する。

二、本文の整定にあたっては、可能な限り底本に忠実に翻刻したが、読解の便をはかり、次のような方針を採った。

1．標目について、底本の新たに［一］［二］［三］などの通し番号を校訂本文の初めに付す。

2．漢字表記について、原則として常用漢字を使い、古体・異体・俗字などは通行の字体に改めた。
3．変体仮名及び二字合体の送り仮名・踊り字などについて、原則として、活字用正字に改めた。
4．仮名を漢字で表記することについて、読者の理解の便を図り、諸本に対応するところに、漢字表記がある場合は、その漢字を表記する。諸本に仮名表記しかない場合は、本来の姿を記した上で、適宜仮名で推測できる漢字を仮名の後に括弧に入れて表記する。例えば、「屋う志〝やう」を「養生」（東本・慶本による）で、「くす梨」を「薬」（東本による）で示す。
5．漢字を仮名に変える場合は、現代語の習慣に従って、「事」を「こと」に、「也」を「なり」に改めた。
6．句読点について、原則として京本と東本に従って付けるが、中黒（・）を施し、書名や引用文と思われる箇所には、それぞれ『』と「」を用いた。
7．丁移りについて、原本には丁数をつけられていないが、通読の便を図り、筆者は原本の配列に従って（幾オ・ウ）のように示し、影印部分と対照できるようにした。

三、校異について
1．諸本の異同については、校訂本文の右に①②③などの番号を付して各項目の末尾にまとめて考察した
2．諸本間における変体仮名の表記上の相違は記さないが、漢字と仮名、仮名表記の異同は諸本の成立の時期といった問題に関わっているため、原状を復元できるように記した。
3．この分析に基づいて、底本を調整して校訂本文を作る。

一　校訂本文

［元泰自序］

養者何。頤其所存也。生者何。生生不息也。編者何。集其所類也。所存者何。精与神気也。生生不息者何。時与命也。所類者何。爾与吾也。既謂所存、又謂生生、何係乎其養也。観乎天地造化、苟失其養、則日月星辰之度乖、四序万物之行戻也。観乎人、苟失其養、則栄衛経脈之度錯、四支百骸之従患也。斯養者、生也。不養、不生也。而謂所存者、不存也。生生者、不生生也。若斯編之

集者、又何用也。観養乎爾、観養乎吾。編之者誰。崎陽高元泰字斗瞻也。時庚申蒲月穀旦。

［慶本序文］

高玄岱、字子新、一字斗瞻。号天漳、又婺山。祖高寿覚、明障郡人。寓於薩摩、生子超方。超方年十六、跡父入明。遊於斉魯燕趙之間。凡十二年、反居長崎。挙為訳士、因占籍。以其渤海高氏故、仮渤海国訓以深見為氏。娶彭城氏、生三子。天漳其仲子。通称新右衛門。幼有淑質、従唐津岩永知新（小字：何求齋）而学。又受医方於明人戴笠。戴笠工筆札、玄岱併通其技。延宝中如京師、参議風早公（小字：実種）特賞識之、薦後西上皇。　上皇召見、問以摂養之方。著『養生編』一巻以進。天和貞享間、仕鹿児島候。亡幾以病辞去。玄岱為人、塁落尚気節、善文章。嘗曰、大丈夫処世、当抗志於青雲。安能碌碌、与里巷人相徴逐乎。勢家豪族必与之抗、而有貧窮好学者、輙就加礼敬。是以為郷党所忌媚。元禄中、清医陸文斉来長崎。玄岱与之会府署。共論医事、往復弁難。詞理条暢、音吐宏亮。聴者傾倒。宝永六年以文学辟幕府。享保七年以病没。年七十四。

［本文三二項］

［一］人生百年を限①りとす。養生②により、千歳にも至る③べし。たとえば、油火④の灯心⑤の少しきと大なるとのごとし⑥（三オ）。人多く⑦もの⑧いう。我は少しくいう。人多く労す。我は少しく労す。人大きに怒（いか）る。我は怒（いか）らず。淡然無為なれば、神気自ずから満つ。これ⑨長生の薬⑩（三ウ）。

【校異】

①京本・慶本の「かきり」は、東本は「限り」に作る。
②京本は「ようじょう」、東本・慶本ともに「養生」に作る。
③京本・慶本は「いたる」、東本は「至」に作る。
④京本は「あぶらひ」、慶本・東本は「油火」に作る。
⑤京本・慶本は「とうしん」、東本は「灯心」に作る。
⑥京本・東本は「ごとし」、慶本は「如し」に作る。
⑦京本・慶本は「おほく」・東本は「多く」に作る。
⑧京本・慶本は「もの」・東本は「物」に作る。
⑨京本・慶本は「これ」、東本は「是」に作る。
⑩京本・慶本は「くすり」、東本は「薬」に作る。

［二］身は常にすこしく①行動②すべし。流水朽（くち）ず③、戸枢むしはまざるは、運動するゆえなり。

【校異】

①京本・東本は「すこしく」、慶本は「少しく」に作る。
②京本・慶本は「動」、東本は「気」に作る。
③京本・慶本は「くちす」、東本は「朽ず」に作る。

［三］食は常に少しき①なるによろし。又う（飢）えしむべからず。う（飢）えずして（四オ）強て食し、かわ（渇）かずして、強ての（飲）む時②は、脾胃労して脹。朝にうえ（飢）しむる事③なかれ。夕にあ（飽）かむる④こと⑤なかれ。但、老たる人は異なり⑥。脾胃虚弱にして、飢⑦やすく、あ（四ウ）き⑧やすし、よく⑨その⑩情を察して、加減すべし。常に食気絶え⑪ざるに⑫よろし。⑬尤老たる人には⑭、精進蔬菜をもち（用）ゆべからず。脾胃みだ（乱）すして（五オ）、元気餒。まことに、七十は、肉にあらざればあ（飽）かずという。

【校異】
①京本は「すこし」、慶本は「少し」、東本は「すこしき」に作る。
②京本は「とき」、慶本は・東本は「時」に作る。
③京本は「こと」、慶本・東本は「事」に作る。
④京本・東本「あかむる」、慶本は「あかしむ」に作る。
⑤諸本は「事」に作るが、現代語の習慣に従って「こと」とする。
⑥京本は「ことなり」、慶本は「こと也」、東本は「異なり」に作る。東本に従う。
⑦京本・慶本は「うえ」、東本は「飢」に作る。
⑧京本・東本は「あき」、慶本は「飽き」に作る。
⑨京本・慶本は「能」、東本は「よく」に作る。
⑩京本は「その」、慶本・東本は「其」に作る。
⑪京本は「たへ」、慶本・東本は「絶」に作る。
⑫京本は「に」、慶本は「を」、東本は「も」に作る。
⑬東本のこの項目に以下の内容はない。
⑭京本は「には」、慶本は「に」に作る。東本は「尤」からこの項目の最後までない。

［四］寝ときは、身をそわだててかが（屈）み、覚め①ては身を②すぐにして伸ぶ。朝夕時をも（持）てす③（六オ）。まず④心をね（眠）むらして、後⑤、目⑥をね（眠）らせよ。眠りがたき⑦は、両手を臍⑧の上⑨に置⑩、せなか（背中）を観念すべし。必ず⑪眠りを得。

いぬる時は、物⑫いわず（六オ）と云り⑬。万気⑭終わり⑮。いか（怒）ること⑯大きに⑰あ（悪）し。

【校異】

①京本・東本は「さめ」、慶本は「覚」に作る。

②慶本に「を」がない。

③京本は「もてすす」、慶本は「もつてす」、東本は「もてす」に作る。

④京本は「まず」、慶本・東本は「先」に作る。

⑤東本に「後」の後に「に」がある。

⑥京本・慶本は「目」、東本は「眼」に作る。

⑦京本は「とき」、慶本・東本は「時」に作る。

⑧京本・慶本は「ほそ」、東本は「臍」に作る。

⑨京本は「うえ」、慶本・東本は「上」に作る。

⑩京本・慶本は「置」、東本は「おき」に作る。

⑪京本・慶本は「かならず」、東本は「心」に作る。東本は字形の相似性から、「必ず」を「心」に誤写したであろう。

⑫京本・慶本は「もの」、東本は「物」に作る。

⑬京本・慶本は「云り」、東本は「いふは」に作る。

⑭東本に「の」ある。

⑮東本に「也」、あるいは「や」ある。東本二ウ。

⑯諸本は「事」に作るが、現代語の習慣に従って「こと」とする。

⑰京本・東本は「大きに」、慶本は「大に」に作る。

〔補記〕京本の六オ一行目冒頭には「す、まず」という紙が貼られているが、その貼り紙の下には「き」と「能その情」という字が確認できる。五オ一行目の冒頭には「きやすし、能その情」が同じ位置に書かれていることから、それは書き写した際に、前の丁のものを書き写したと考えられる。

〔五〕柳公度年八十九ある人これに問（とう）①云く②、これ③脾胃をもって④ひ（冷）や⑤かなる物をあたた（温）めず。生なるものを（六ウ）こな（熟）せず。また元気を以て⑥悦び⑦、いか（怒）りをなさず、気海常にあたた（暖）かなるのみ。

【校異】

①京本は「問」、慶本は「とふ」、東本は「問テ」に作る。

②京本は「云く」、慶本は「いはく」、東本は「曰」に作る。

③京本・慶本は「これ」、東本は「是」に作る。

④京本・慶本は「もつて」、東本は「以テ」に作る。

⑤京本は「ひややか」、慶本は「ひやか」、東本は「ひやか」に作る。
⑥京本・慶本は「もつて」、東本は「以テ」に作る。
⑦京本・慶本は「よろこび」、東本は「悦ひ」に作る。

［六］古筬（ふるきいましめ）①に云、念のお（起）こることを恐れず②。ただ③、おそらくはさとること④のおそ（遅）きことを⑤（七オ）。

【校異】
①東本は「右筬」に作っている。
②京本・慶本は「おそれ」、東本は「恐れ」に作る。
③京本は「ただ」、慶本は「只」、東本は「た」に作る。
④諸本は「事」に作るが、現代語の習慣に従って「こと」とする。
⑤京本・東本は「こと」、慶本は「事」に作る。

［七］身は安楽を以て①本②とす。安楽は保養③を以て④本とす。本すでにかた（固）き時⑤は、疾病、何によって⑥か生せん。夭横、何によって⑦かいた（至）らん（七ウ）。

【校異】
①京本・慶本は「もつて」、東本は「以テ」に作る。
②京本・慶本は「本」、東本は「木」に作る。
③京本・慶本は「保養」、東本は「保寿」に作る。
④京本・慶本は「もつて」、東本は「以テ以テ（ママ）」に作る。
⑤京本は「とき」、慶本・東本は「時」に作る。
⑥諸本は「よつて」に作るが、現代語の習慣に従って「よって」とする。
⑦同前。

［八］食後には、帯をゆる（緩）め、腰をの（伸）べ、椅子によりかかり（寄り掛かり）、気をのびやかにもち、閑（しずか）か①に息②を吹く③べし。食気、なず（泥）まず④、快き⑤ものなり。尤食前食後にいか（怒）ること大きに⑥あ（悪）し。（いか）嗔って⑦は、喰（くろ）う⑧ことなかれ。気、逆上して、食、胸⑨にふさ（塞）がり、大病の本となる。

【校異】
①東本は「閑かに」、慶本は「静かに」、京本は「しづかに」に作る。
②京本・慶本は「いき」・東本は「息」に作る。

③京本には「ふくむ」に作るが、東本と慶本にはそれぞれ「吹」と「ふく」に作る。
④京本・慶本は「なつまず」、東本は「なすまず」に作る。
⑤京本・慶本は「こころよき」、東本は「快キ」に作る。
⑥京本は「大き」、慶本・東本は「大に（ニ）」に作る。
⑦京本・慶本は「いかつては」、東本は「嗔テハ」に作る。
⑧京本・東本は「くらう」、慶本は「喰ふ」に作る。
⑨京本・慶本は「むね」、東本は「胸」に作る。

［九］食後に茶をの（飲）み、歩行することまこと（誠）によろし。す（過）ごすべからず（八ウ）。茶はただ①一、二杯の間、歩行すること食なか（半）ば消すると覚え②なば、休息すべし。尤、食し畢その③ままに座することなかれ。両脚④とせなか（背中）と腰なんと⑤をさするべし。胸⑥をすかすか食気（九オ）をめくらして、一身にうるお（潤）いをなす。物食後に口⑦そそ（濯）ぐ⑧こと⑨よし。又臥するに及んで⑩口濯ぐ⑪ことさらに⑫よし⑬。一日の食気の口中、歯⑭の間に残りしをそそ（濯）ぎ⑮さればなり⑯（九ウ）。

【校異】
①京本・慶本は「只」、東本は「たゝ」に作る。
②京本・慶本は「おぼえ」、東本は「覚え」に作る。
③京本・東本は「その」、慶本は「其」に作る。
④京本・東本は「なんと」、慶本は「と」に作る。
⑤京本・慶本は「むね」、東本は「胸」に作る。
⑥京本・東本は「その」、慶本は「其」に作る。
⑦京本・慶本は「くち」、東本は「口」に作る。
⑧京本・慶本は「そそく」、東本は「すすく」に作る。
⑨京本は「こと」、慶本・東本は「事」に作る。
⑩京本・慶本は「およんで」、東本は「及で」に作る。
⑪京本は「くちそそく」、慶本は「口そそく」、東本は「口すすく」に作る。
⑫京本・慶本は「さらに」、東本は「更」に作る。
⑬京本・東本は「よし」、慶本は「宜」に作る。
⑭京本・慶本は「歯」、東本は「歯牙」に作る。
⑮京本・慶本は「そそぎ」、東本は「すすぎ」に作る。
⑯京本・慶本は「なり」、東本は「也」に作る。

［十］心に過去未［来人我の悪事を思う①ことなかれ。唯一善を以て②念とせば、齢③をのぶべし。

【校異】

①京本・慶本は「おもふ」、東本は「思ふ」に作る。
②京本・慶本は「もつて」、東本は「以て」に作る。
③東本と慶本は「齢」に作る。東本四ウと慶本四ウを参照されたい。

［十一］一老人あり。かたち（形）①、壮年の如し②。その③養生をと（問）えば、他術なし（一〇オ）、平生強て湯水をの（飲）まざるのみ。脾胃は湿（しつ）をにくむ。湯水をの（飲）むことすく（少）なければ、脾胃つよ（強）く、気、さか（盛）んなり④。

【校異】

①東本には「さ」が書いて、その右に「ち」を書いてある。
②京本は「その」、東本・慶本は「其」に作る。
③京本・慶本は「そそく」、東本は「すすく」に作る。
④京本・慶本は「なり」、東本は「也」に作る。

［一二］①十六字の訣と云う②事あり。日用（一〇ウ）二六時中、行住座臥ともに、事をつとむるにも、つとめざるにも、さまた（妨）げず。只心③のおもきし④折⑤、行う⑥べし。其語に曰く⑦、「一吸便提、気気帰臍。一提便咽。水火相見」。大抵⑧（一一オ）、これ⑨一呼一吸の引息（いき）⑩とはく（吐）息⑪を何のさわりもなく、静かに⑫いたすことなり。さて⑬、これ⑭を行わん⑮と思う⑯ときは⑰、まず⑱上顎と下顎を舌にてかきまわし（掻き回し）、口中にた（溜）ま（一一ウ）りし津を汨（こつ）⑲と言って⑳のみ。引息㉑を鼻にて引き㉒、心を臍の下一寸ほどにつけよ。臍㉓の下一寸、梵にはこれを㉔憂陀那と名付く㉕、此には丹田という。よくその㉖所に心をとむべし（一二オ）。それよりそろそろと息㉗をつ（付）きながら、又右の如く㉘、心次第に何遍もいた（致）すなり㉙。只日用の間、行わん㉚と要せば行え㉛。止（やめん）㉜と要せば、止めよ。久しく㉝たも（保）ては、病㉞をさり、と（一三オ）し㉟をのぶるものなり㊱。尤㊲、一朝一夕のよく㊳する所にはあらず。物よろこび㊴にもうれい㊵にも、或は深夜の独居、市中の繁華㊶、或は風雨雷電のはげしき下㊷にても、我にした（親）し（十三オ）きもの㊸は、一呼一吸よりほか他㊹事なし。なが（長）く此呼吸をまほり、我が物㊺にせよ。

【校異】

①東本は第一三とする。東本六ウ。

②京京本・東本は「と云」、慶本は「といふ」に作る。
③京本・慶本は「心」、東本は「こころ」に作る。
④京本は「おもきし」、東本と慶本には「おもむきし」に作る。
⑤京本・東本は「折」、慶本は「おり」に作る。
⑥京本・東本は「おこなふ」、慶本は「行ふ」に作る。
⑦京本は、「其語にいはく」、慶本は「其語云」、東本は「其語ニ曰」に作る。
⑧京本は「抵」、慶本は「低」、東本は「抓」に作る。
⑨京本・慶本は「これ」、東本は「是」に作る。
⑩京本・東本は「いき」、慶本は「息」に作る。
⑪京本・東本は「いき」、慶本は「息」に作る。
⑫京本・慶本は「しつかに」、慶本は「静に」に作る。
⑬東本には「も」があるが、京本と慶本にはない。東本七オと慶本五オを参照されたい。
⑭京本・慶本は「これ」、東本は「是」に作る。
⑮京本には「於古奈者无（行わん）」、東本には「以多左无（致さん）」、慶本には「於己奈八无（行わん）」に作る。東本七オと慶本五オを参照されたい。
⑯京本は「おもふ」、慶本・東本は「思ふ」に作る。
⑰京本は「おもふとき」、慶本は「思ふ時は」、東本は「思ふ時」に作る。
⑱京本・慶本は「まづ」、東本は「先」に作る。
⑲京本は「汨と」、慶本は「こつ」、東本は「汨ト」に作る。
⑳京本・慶本は「いふて」、東本は「云テ」に作る。
㉑京本・東本は「いき」、慶本は「息」に作る。
㉒京本・慶本は「ひき」、東本は「引」に作る。
㉓京本は「ほそ」、慶本・東本は「臍」に作る。
㉔東本には「これを」がない。
㉕京本・東本は「なつく」、慶本は「名付」に作る。
㉖京本・東本は「その」、慶本は「其」に作る。
㉗京本は「いき」、慶本・東本は「息」に作る。
㉘京本・東本は「ごとこ」、慶本は「如く」に作る。
㉙京本は「なり」、慶本・東本は「也」に作る。
㉚京本は「おこなはん」、慶本・東本は「行わん」に作る。
㉛京本は「おこなえ」、慶本・東本は「行え」に作る。
㉜京本は「止」、慶本は「止ん」、東本は「やめん」に作る。
㉝京本は「あああ」、慶本・東本は「久しく」に作る。

㉞京本・慶本は「やまい」、東本は「病」に作る。
㉟京本は「とし」、慶本・東本は「年」に作る。
㊱京本は「ものなり」、慶本は「もの也」、東本は「物也」に作る。
㊲東本にはない。
㊳京本・東本は「のよく」、慶本は「の（乃）能」に作る。
㊴京本・慶本は「よろこび」、東本は「歓」に作る。
㊵京本・慶本は「うれひ」、東本は「愁」に作る。
㊶京本・東本は「花」、慶本は「華」に作る。
㊷京本には「もと」というルビを振っている。
㊸京本・慶本は「もの」、東本は「物」に作る。
㊹京本は「ほか」、東本は「外」、慶本は「外に」に作る。
㊺京本は「わが物」、慶本は「我もの」、東本は「我物」に作る。

［十三］陶隠居云く①、道家さらに生を養う②旨③あり。第一、いか（怒）りすく（少）（一三ウ）なからしむ④のみ。

【校異】

①京本・東本は「いはく」、慶本は「云く」に作る。
②京本は「やしなう」、慶本・東本は「養う」に作る。
③京本・慶本は「むね」、東本は「むし○（ママ）」に作る。
④東本に「る」ある。東本八オ。

［十四］心①しず（静）かなれば、神②よろこぶ。神よろこぶ時③は、福、④生す。人、よく毒性を化して、死を救い、喜神をやしな（養）って⑤、生をのべば、かなら（必）ず⑥（一四オ）身のわざわ（災）い⑦をさ（去）り、かねて人のうれい⑧をも除⑨かん。

【校異】

①京本は「こころ」、慶本・東本は「心」に作る。
②京本に「たましい」というルビを振っている。
③京本・慶本は「とき」、東本は「時」に作る。
④京本に「さいわい」というルビを振っている。
⑤京本・慶本は「やしなうて」・東本は「やしなひて」に作る。
⑥京本・慶本は「かならず」、東本は「必」に作る。
⑦京本・慶本は「わざわい」・東本は「わかひ」に作る。
⑧京本・慶本は「うれひ」、東本は「愁」に作る。

⑨京本・慶本は「のぞかん」、東本は「除かん」に作る。

［一五］九十餘の老人あり。諸事、少年におと（劣）らず①。これに養生を問う曰く②、食を喫するにこま（細）かに（一四ウ）か（噛）み、しず（静）かにの（飲）むべし。かくのこど（如）くなれば、精味、脾胃に散し、華③色はたえに満（みつ）④。もしあら（粗）くはや（早）ければ、只⑤糟粕となって⑥、腸胃にみち（道）ふさ（塞）がるのみ（一五オ）。泰西水が飲食に「三化」ありという⑦もこれ⑧なり⑨。「烹煮糜爛」と云て、よく物をに（煮）ること。これ⑩、「火化」という⑪。「細嚼緩咽」と云て、細かにか（噛）みしず（閑）か⑫にの（呑）む⑬こと⑭。これ⑮を「口化」という⑯。「蒸変（一五ウ）伝送」と云て、脾胃にてこなすこと⑰。これ⑱を「胃化」⑲という⑳。唯㉑よく烹熟（に）㉒したる物をしず（閑）か㉓に食すれば、脾胃を労せず、臓腑潤いて㉔、気血を生す（一六オ）。

【校異】

①「少年におとらず」について、東本には、「お年もわからず」に作る。

②京本は「とふいはく」、慶本は「問ふいはく」、東本は「問、答て云」に作る。

③京本・東本は「華」、慶本は「花」に作る。

④京本は「満」、慶本は「充」、東本は「みつ」に作る。

⑤東本には「只」がない。

⑥京本・慶本は「なりて」・東本は「成て」に作る。

⑦京本・慶本は「いう」、東本は「云」に作る。

⑧京本・東本は「是」、慶本は「これ」に作る。

⑨京本・慶本は「なり」、東本は「也」に作る。

⑩東本には「ヲ」がある。

⑪京本・慶本は「いう」、東本は「云」に作る。

⑫京本・慶本は「しずかに」、東本は「閑に」に作る。

⑬京本・慶本は「のむ」、東本は「呑」に作る。

⑭諸本は「事」に作るが、ここは「こと」にする。

⑮京本・慶本は「これ」、東本は「是」に作る。

⑯京本・慶本は「いう」、東本は「云」に作る。

⑰京本は「こと」、慶本・東本は「事」に作る。

⑱京本・東本は「是」、慶本は「これ」に作る。

⑲京本には「化」という字がない。慶本と東本により補う。東本九オ、慶本六オ。

⑳京本・慶本は「いう」、東本は「云」に作る。

㉑京本と東本には「唯」に作るが、慶本には「只」に作る。東本九オ、慶本六オ。
㉒京本は「烹じゅく」、慶本・東本は「烹熟」に作る。
㉓京本・慶本は「しずかに」、東本は「閑に」に作る。
㉔京本は「うるをひて」、慶本は「をうるおひて」、東本は「にほひて」に作る。

［一六］『衛生歌』に曰く①、「長生をもと（求）めんとせば、まず②性をいまし（戒）めよ。火いで③ざれば、神おのずから定まる④。木、もし火をされば、灰とならず。人よく性をいまし（戒）むれば、また⑤命を延ぶ⑥」（一六ウ）。

【校異】
①京本は「いはく」、慶本・東本は「云」に作る。
②京本は「まず」、慶本・東本は「先」に作る。
③京本・慶本は「いで」、東本は「出」に作る。
④京本・東本は「さだまる」、慶本は「定る」に作る。
⑤京本は「また」、慶本・東本は「又」に作る。
⑥京本・慶本は「のぶ」、東本は「延」に作る。

［一七］菓類の益あるもの①は、龍眼肉第一なり②。但し③、用様④にていよいよ益あり。龍眼⑤一つばかり、口中にふく（含）み、其⑥汁を吮の（飲）むこと⑦、幼少の乳をの（呑）む⑧がごとくすべし。かわきをやめ、潤を（一七オ）まし、大き⑨に心をやしな（養）う。誠にこれ⑩現成底の「帰脾湯」也。もし用様をし（知）らず、みだりに多く食⑪せば、胸を⑫なず（泥）む事あり。

【校異】
①京本と慶本には「もの」に作るが、東本には「物」に作る。
②京本は「なり」、慶本・東本は「也」に作る。
③京本・慶本は「但」、東本は「但し」に作る。
④京本・東本は「用様」、慶本は「用ひやう」に作る。
⑤京本・東本は「龍眼」、慶本は「龍眼肉」に作る。
⑥京本・慶本は「其」、東本は「その」に作る。
⑦京本は「こと」、慶本・東本は「事」に作る。
⑧京本・慶本は「のむ」、東本は「呑む」に作る。
⑨京本・東本は「大きに」、慶本は「大に」に作る。
⑩京本は「これ」、慶本・東本は「是」に作る。
⑪京本には「おほく」、慶本には「多く」に作るが、東本は「夕食」に作る。理解しやすさを考えて、「多く」にする。
⑫京本は「を」、慶本・東本は「に」に作る。

［一八］人生、たとえば一場の宴席のごとし（一八オ）、酒をの（飲）むこと多少①同じ②からざれども、同時③にして散す。欲事、多少同じ④からされども、同時にして死す。ひとりみずや。席をのがるるものを。（一八オ）

【校異】

①京本・慶本は「多少」、東本は「する」に作る。
②京本・慶本は「おなじ」、東本は「同じ」に作る。
③京本は「同事」、慶本・東本は「同時」に作る。
④京本は「おなじ」、慶本・東本は「同じ」に作る。

［一九］湧泉の二穴、あし（足）のうら（裏）の真中より一寸ほど上にあり。精気の生ずる所なり①。依之（よってこれ）平生あし（足）のうら（裏）を②ひやすべからず。常に③童男稚女のあたた（暖）かなる手にて擦するべし（一八ウ）。④但此時必欲火をお（起）こるになかれ。

【校異】

①「精気の生ずる所なり」という文は、慶本にはない。
②「精気」から「うらを」まで、慶本にはない。
③東本にはない。
④以下は東本しかない。

［二〇］林英と云人、年①をのぶるために致仕す。行歩、壮に、かたち（形）、健なり②。人、その③術をと（問）ういわ（曰）く、「我④、ただ⑤平生心になや（悩）みなし。たとへば、明が⑥、飯の喫するなきとても、また⑦うれ（憂）えずこと⑧（一九オ）いた（至）れば、これをやりて、適⑨然として、胸中に⑩とどめず。

【校異】

①京本と慶本には「年」に作るが、東本には「寿」に作る。
②京本・慶本は「なり」、東本は「也」に作る。
③京本・東本は「その」、慶本は「其」に作る。
④京本・慶本は「われ」、東本は「我」に作る。
⑤京本・慶本は「但」、東本は「ただ」に作る。
⑥京本・東本は「明が、」、慶本は「明日の」に作る。
⑦京本・東本は「また」、慶本は「亦」に作る。
⑧京本・慶本は「事」、東本は「こと」に作る。
⑨東本に「遍」に作る。
⑩東本には「に」がない。

［二一］養生の具は水と火との如し①、欠くからず②。すぐ③れば反て害をなす。

【校異】

①京本は「ごとし」、慶本は「如し」に作る。

②東本は簡略して連写しているか、幾つかの字が欠けているか、さらに検討する必要がある。

③京本は「すぐれば」、慶本は「過れば」に作る。

［二二］或人、恵海①禅師にと（問）う、「道を修す（一九ウ）ること②、如何してか功ある」。師いわく、「飢来吃飯、困来眠。」いわく、「人みな③かくの如し④、何ぞ功ということ⑤があらん⑥。」いわく、「同じ⑦からず、他吃するとき⑧、あえて吃せず、百種須索。ねむる時（二〇オ）、あえてねむらず、千般計較⑨。まことに⑩此語常に説く⑪といえども、体認するもの⑫すくなし。若能⑬受用せば養生そのうち⑭にあらむ⑮。

【校異】

①京本・慶本は「海」、東本は「河」に作る。

②京本・慶本は「する事」、東本は「すれも」に作る。

③京本・慶本は「みな」、東本は「皆」に作る。

④京本・東本は「ごとし」、慶本は「如し」に作る。

⑤京本は「いうこと」、東本は「云事」、慶本は「いう事」に作る。

⑥京本・慶本は「あらん」、東本は「を得ん」に作る。

⑦京本・慶本は「おなじ」、東本は「同じ」に作る。

⑧京本には「とき」、他本には「時」に作る。

⑨慶本は「す」がある。

⑩京本・東本は「まことに」、慶本は「ま事に」に作る。

⑪京本は「とく」、慶本は「説」、東本は「いふ」に作る。

⑫京本・慶本は「もの」、東本は「物」に作る。

⑬京本は「若能」、慶本は「もし能」、東本は「もしよく」に作る。

⑭京本・慶本は「うち」、東本は「内」に作る。

⑮京本は「む」、慶本・東本は「ん」に作る。

［二三］百病夭横おお（多）くは飲食による（二〇ウ）。飲食のわざわ（災）いをなすこと、声色にすぎたり。声色は絶すべし、飲食は一日も廃①すべからず。この②ゆえに、益をなすことおお（多）く、わざわいをなすことも亦おお（多）し③（二一オ）。

【校異】
①京本に「すつ」というルビを振っているが、東本には「捨べからず」、慶本には「廃すべからず」に作る。
②京本・慶本は「この」、東本は「此」に作る。
③京本は「おおし」、慶本は「多し」、東本は「多也」に作る。

［二四］① 年をのべんと要せば、唯能②気をやしな（養）うべし。気をやしな（養）えば、精神ともに③生す。この故④に、気は神の祖、精は気の子と云り⑤。
【校異】
①東本には、この項目がない。
②京本には「唯能気を」、慶本には「只気を能く」に作る。
③京本は「とも」、慶本は「ともに」に作る。
④京本は「ゆえ」、慶本は「故」に作る。
⑤京本は「云り」、慶本は「いえり」に作る。

［二五］① 人生元気をう（受）くる所、なが（長）く、みじか（短）きあり。ただ利欲貪愛のために、元気をけつられ、なが（長）きものはみじか（短）く、みじか（短）きものはせま（迫）る。その②天年をお（終）えずして死す。豈③いた（痛）ましからざらん④や。是をもつて（二二オ）、聖智の人、養生ということあり。
【校異】
①東本には、この項目がない。
②京本は「その」、慶本は「其」に作る。
③京本は「あに」、慶本は「豈」に作る。
④京本は「らん」、慶本は「らむ」に作る。

［二六］① 行住座臥、一意にして散せず。かた（固）く丹田を守れば、津を生し、気を生す。かたち（形）、さかんなるべく、老にた（耐）ゆべし。これ呼吸をまも（守）って（二二ウ）、丹田をやしな（養）う事也。
【校異】
①東本には、この項目がない。

［二七］思おお慮の害は、酒色よりもはなは（甚）だし。思慮（多）き①時②は、心火のぼる。心火、のぼれば、腎水、下にかる③。心と腎とまじ（交）わらざれば人理絶す（二三オ）。
【校異】
①京本は「おおき」、慶本・東本は「多き」に作る。

②京本は「とき」、慶本・東本は「時」に作る。
③京本は「さがる」、慶本・東本は「かる」に作る。

［二八］人もし欲と怒と過ぎし①後（のち）のおも（思）いをなさ②ば、たましい（魂）、おの（自）ずから清く、気、おの（自）ずから平かならなむ③。

【校異】
①京本・慶本は「すぎし」、東本は「過し」に作る。
②東本には「寸（ず）」がある。東本一二オ。
③京本は「平らかならむ」、東本は「平らかならん」、慶本は「平ならむ」に作る。

［二九］養生の術、種々多し①といへども、唯②、心をうご（動）かさざる③をもつて④（二三ウ）、専とせよ。たとえば、泰山、前にくずれかかるとも動かず。況わんや⑤わずかの⑥ことにひかれ、愁い⑦嗔り⑧をなさんや。むかし（昔）、康仲俊、年八十あまり、きわ（極）めて清健⑨也（二四オ）。みずからいう、わ（若）かりし折⑩、『千字文』をよ（読）むによって⑪さと（悟）ること⑫あり。所謂「心動神疲」という⑬四字也⑭。平生、事⑮にあって、いま（未）だかつ（嘗）て心をうご（動）かさず。このゆえに⑯、老て⑰おとろ（衰）えずと（二四ウ）いう⑱。

【校異】
①京本・慶本は「おおし」、東本は「多し」に作る。
②京本は「唯」、慶本・東本は「只」に作る。
③京本・慶本は「うこかさざる」、東本は「うこかさざれ」に作る。
④京本・慶本は「もつて」、東本は「以テ」に作る。
⑤東本は「況わんや」、他本は「いわんや」に作る。
⑥京本・慶本は「の」・東本は「な」に作る。
⑦京本・慶本は「うれい」、東本は「愁」に作る。
⑧京本・慶本は「いかり」、東本は「瞋」に作る。
⑨京本・慶本は「清健」、東本は「健」に作る。
⑩京本・東本は「折」、慶本は「おり」に作る。
⑪京本・慶本は「よつて」、東本は「因」に作る。
⑫諸本は「事」に作るが、現代語の習慣に従って「こと」とする。
⑬京本・東本は「と云」、慶本は「という」に作る。また、京本には、「四字也」が「云」のそばに小さい字で書かれてある。
⑭京本・東本は「也」、慶本は「なり」に作る。
⑮京本・慶本は「事」、東本は「こと」に作る。

⑯京本・慶本は「このゆへに」、東本は「此故ニ」に作る。

⑰京本・慶本は「老て」、東本は「老」に作る。

⑱京本・慶本は「といふ」、東本は「ト云」に作る。

［三〇］彭祖いわく、生をやしな（養）う道は、これ①を損なうこと②なき③のみ④。

【校異】

①京本・慶本は「これ」、東本は「是」に作る。

②諸本は「事」に作るが、現代語の習慣に従って「こと」とする。

③京本・慶本は「なき」、東本は「なかれ」に作る。

④東本には「なかれとのみ」、他本には「なきのみ」に作る。東本一二ウ、慶本九オ。

［三一］「呵呼呬嘘嘻吹」「延年六字」の訣（けつ）ということ①あり。その②法、口にて息③を（二五オ）は（吐）き、鼻にて息④を吸。なが（長）くたも（保）ち、おこな（行）えば、おの（自）ずから益あり。そのゆえ⑤は、おのおの（各各）臓腑の本より出入する呼吸なればなり⑥。凡此六つの文字⑦を念すること⑧、何も⑨しずか⑩な（二五ウ）るによろし。こえ（声）⑪あらく急にすれば、却て益なし。ただ⑫我⑬もそのこえ（声）⑭をき（聞）かざるかごとくせよ。内に引息⑮は、猶⑯閑か⑰なるに⑱よし。「呵」は心を治し、「呼」は脾を治し、「呬」は肺を（二六オ）治し、「吹」は腎を治す。但、此六字はよろしく唐音にて念すべし。自然とその⑲声にかな（叶）う⑳もの㉑なり㉒。一㉓、「ほおう」、「呵」也。一、「ふう」、「呼」也。一、「ひ」、「呬」也。一、「ひゆ」、嘘也。一、「ひいい」、嘻也。一、「つふい」、吹也（二六ウ）。これ㉔唐音なり。いづれも一字ごとに六度ずつ念す㉕。これ㉖を一小周という。それより次第に六六三百六十の数を竟㉗。尤、此数ありといえども、かかわるべからず。只、心の趣き㉘に（二七オ）まか（任）すべし。心、鬱したる時は、「呵」を念ぜよ。心のうち㉙の毒を散す。食後には、「呼」を念ぜよ。食毒を消す。餘はその㉚類にならえ。

【校異】

①京本は「といふこと」、慶本は「といふ事」、東本は「と云事」に作る。

②京本は「その」、慶本・東本は「其」に作る。

③京本・慶本は「いき」、東本は「息」に作る。

④京本・慶本は「いき」、東本は「息」に作る。

⑤京本・慶本は「そのゆえ」、東本は「其故」に作る。

⑥京本は「なり」、慶本・東本は「也」に作る。
⑦京本・慶本は「六つの文字」、東本は「六文字」に作る。
⑧京本は「こと」、慶本・東本は「事」に作る。
⑨京本・慶本は「何も」、東本は「いつれも」に作る。
⑩京本・慶本は「しずか」、東本は「閑か」に作る。
⑪京本・慶本は「こえ」、東本は「声」に作る。
⑫京本・東本は「ただ」、慶本は「只」に作る。
⑬京本は「われ」、慶本・東本は「我」に作る。
⑭京本は「こえ」、慶本・東本は「声」に作る。
⑮京本は「引いき」、慶本は「ひくいき」、東本は「引息」に作る。
⑯京本・東本は「猶」、慶本は「なお」に作る。
⑰京本・慶本は「しずか」、東本は「閑か」に作る。
⑱東本には「に」がない。
⑲京本は「その」、慶本は「此」、東本は「其」に作る。
⑳京本・慶本は「かなう」、東本は「叶」に作る。
㉑京本・慶本は「もの」、東本は「物」に作る。
㉒京本・慶本は「也」、東本は「なり」に作る。
㉓京本・慶本は「一」、東本は「〇」に作る。後も同様である。
㉔京本・慶本は「これ」、東本は「是」に作る。
㉕東本には小字で「一字ごとに六度ずつ念す」と書いてある。
㉖京本は「これ」、慶本・東本は「是」に作る。
㉗慶本には「竟る」に作る。
㉘京本・慶本は「おもむき」、東本は「趣」に作る。
㉙京本は「うち」、慶本・東本は「内」に作る。
㉚京本は「その」、慶本・東本は「其」に作る。

［三二］① 養生禁忌の理、小節の常という（二七ウ）ども、また②大道の要あり。わずかの益といって、おさめずんばあらじ。わずか③の失といって、ふせ（防）かずんばあらじ。小事というども、但④久しく⑤まも（守）れ、よし。おのずから効あらん（二八オ）。

【校異】

①東本には項目番号がない。三十番の「彭祖」云々に続く。
②京本・慶本は「また」、東本は「又」に作る。
③京本・慶本は「わずか」、東本は「纔」に作る。
④京本・慶本は「但」、東本は「只」に作る。
⑤京本は「久敷」、慶本・東本は「久しく」に作る。

［玄光跋文］

題養生篇①

斗膽所著之『養生編』者、蓋因太上皇②之命所述也。其言不出民生日用之間、而能如其説行、則上逮上寿、下不失中寿。非老錬于醫術者、則不能道矣。斗膽、姓高氏、名元泰。斗膽者、其字也。早学于大明西湖独立来游此土、而盡得其術。又遊京師、探明医鉅儒之堂奥。今日亹亹研精于三教聖人之書、将大有為者也。区区之『養生編③』、不可卒于斗膽。時　貞享④丙寅二月望独菴叟玄光書

【校異】

①京本は「題養生編後」、慶本は「題養生篇」に作る。

②慶本は「太上皇」を平出で書く。

③京本は「編」、慶本は「篇」に作る。

④京本は「享」、慶本は「亨」に作る。

［慶本跋文］

右養生篇一巻ハ、伴大受の許より借てうつしぬ。大受名忠福、長楽窩と号す。父睡月翁は極て茶事に好ける人にて、浅草金龍山中に碑をたてたりしに、大受のいまた弱冠の頃にて、碑文を書せしめられたりとかたる。大受曽て京師の邸管を勤し時、熙（？）も遊学せしかハ、深く其懇切を得たり。そハ嘉永己酉より壬子之春、正月の初に、予は江戸へ帰り来つ。大受は其夏帰られたり。いさ京を舞せんといへるに心おきてはいそきつゝ、洛東長楽寺へ碑をたてゝ、其面に「夢」といふ一大字を書し、「投筆帰化江都」とかきすてゝ、帰りぬとて、長楽寺の景色画かきたるものともみせぬ。洛西の瑩堂和尚、長楽の二字を筆とりて、いまに其家に額となしもてり。大受の人となり、この一つをもても、おのつから志るへくになん。

二　影印篇　※本文最後に掲載した。

おわりにかえて―『養生編』に関する問題提起

筆者が成立した経緯や写本流伝のルートをある程度明らかにした『養生編』は、幾つかの分野において重要な研究価値がある。成立の経緯からいえば、実種はどの点において元泰を評価したのか、また元泰と実種、さらに上皇との交流の実態など、日中交流史、日本思想史においては興味深い課題であろう。近代になると、中川徳基、富士川遊、土肥慶蔵、幸田成友など著名な蔵書家、歴史学者、または医学者らに所蔵されていたことは、蔵

書史においても研究に値する。しかも、京本には金尾文淵堂の印鑑があって、それは文淵堂が『養生編』を出版しようとしたことを意味するならば、近代出版史においても研究すべきであろう。

ほかの写本には多少誤写したところを訂正した痕跡があるのに対して、慶本は全くそういうところがないことから、慶本は他本とは作成した姿勢が違っており、重要な伝本であることの証明となる。その跋文においては、伴大受のところで『養生編』を借りて書き写したことを記している。そして伴大受の生涯を記述する。それは伴大受という人物について唯一の記録ではないと、筆者が伴大受について調べるうちにそう思うようになった。さらに、伴大受が長楽寺で碑を立てて、その面に「夢」という大字を書し、「投筆帰化江都」と書いた云々と記している。その「夢の石碑」はすでに長楽寺の隣にある円山公園の代表的観光スポットとなったほど有名である。下記の田中緑紅の記述は代表的である。

滝の南に「夢」と一字だけ彫った岩があります。忠臣蔵浅野長規の医者寺井玄渓が江戸から京に来てこの辺に住み、庭の岩に夢と彫らしたと云います。義士は切腹し「人生は夢なり」とこの石を残したと云います[六]。

しかし、筆者が円山公園で現地調査したところ、正面は「夢」と書かれているが、その側面には「嘉永壬子六月、伴大受擲筆帰化江都。時、年五十」と書かれていることを確認した[七]。それは「慶本跋文」に記されている「壬子之春、正月の初に、予は江戸へ帰り来つ。大受は其夏帰られたり」と一致しているため、「慶本跋文」は信憑性があることの裏付けになろう。

図１　円山公園「夢の碑」側面

（筆者が二〇二二年九月撮影したものである）

『養生編』は元泰がその師匠、独立性易の話をまとめたものであることは、すでに拙稿で論じたことである。その内容の出典を考察すれば、明代の冷謙の『修齢要旨』や『養生余録』など明代の医学・養生関係の著作だけではなくて、『泰西水法』のような水利・科学関係の著作も引用していることから、独立性易の学問視野の広さがうかがえる。この『泰西水法』は当時鎖国の日本において、そのキリスト教関係という性質で禁書とされており、寛政四（一七九二）年まで識者の間にもその内容が明らかではかなった[八]。それに対して、元泰の『養生編』を通じて、独立の『泰西水法』に関する知識を百年以上より早く日本に伝来した。このことがもつ重大な意義はいうまでないであろう。

このように、上記の『養生編』の成立・流布にかかわる人物と日中交流の実態や、内容に関する問題は、今後の課題としたい。

〔謝辞〕本稿を成すにあたり、貴重資料の利用にご高配を賜りました各所蔵機関の皆様に対して、深くお礼を申し上げます。また、「慶本跋文」を翻刻する際に、引野享輔先生にご教示をいただき、深謝申し上げます。なお、本研究は、JST 科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業 JPMJFS2102 の支援を受けたものです。

註

一　賈前掲文。

二　通称深見新右衛門貞恒、姓は高・深見、名は梅松、元泰、玄岱。号は天漪、婺山。字斗瞻、子新。石村喜英『深見玄岱の研究：日中文化交流上における玄岱伝と黄檗独立禅師伝』、雄山閣、一九七三、三十九頁を参照されたい。本稿においては、名を元泰に統一する。

三　元泰が独立の書を伝承して発揚したことは、拙稿を参照されたい。「独立性易的六書学与日本近世書法（独立性易の六書学と日本近世書法）」、『中国書法』（二〇二二年第六期）、中国書法家協会、二〇二二。

四　校訂本文の「慶本跋文」及び拙稿、「独立性易から貝原益軒までの日中養生文化の架け橋：高元泰の『養生編』について」（『日本思想史研究』（第五四号）、東北大学大学院文学研究科日本思想史研究室、二〇二二）を参照されたい。

五　中川徳基編『中川徳基蔵書目録』（第二冊）、中川徳基自筆本、国立国会図書館所蔵。

六　田中緑紅『円山公園（上）復刻版』、三人社、二〇一九、一三頁。また同様な記述は、『円山公園：開園百周年記念』（京都市建設局公園緑地部公園管理課編纂・発行、一九八八年、二二頁）をも参照されたい。

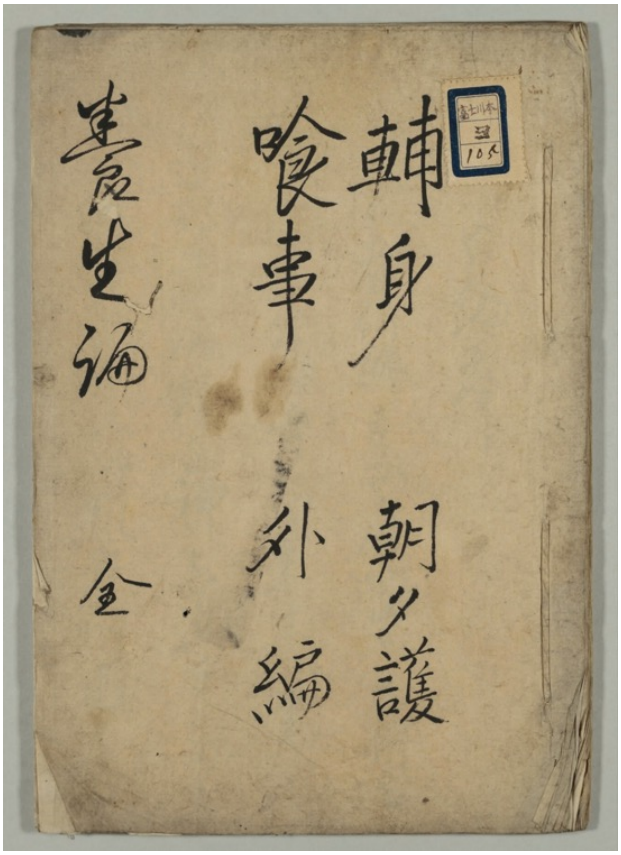
七　画像円山公園「夢の碑」側面に参照されたい。

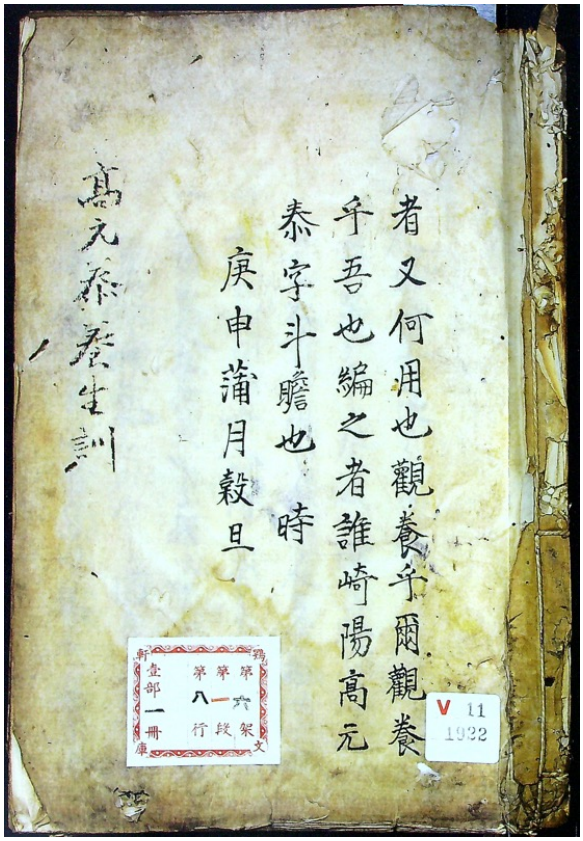
八　鮎沢信太郎「熊三抜の泰西水法とその日本への伝来」、東京教育大学文学部東洋史学研究室編『東洋史学論集第三』、不昧堂書店、一九五四、五頁。

（東北大学大学院）

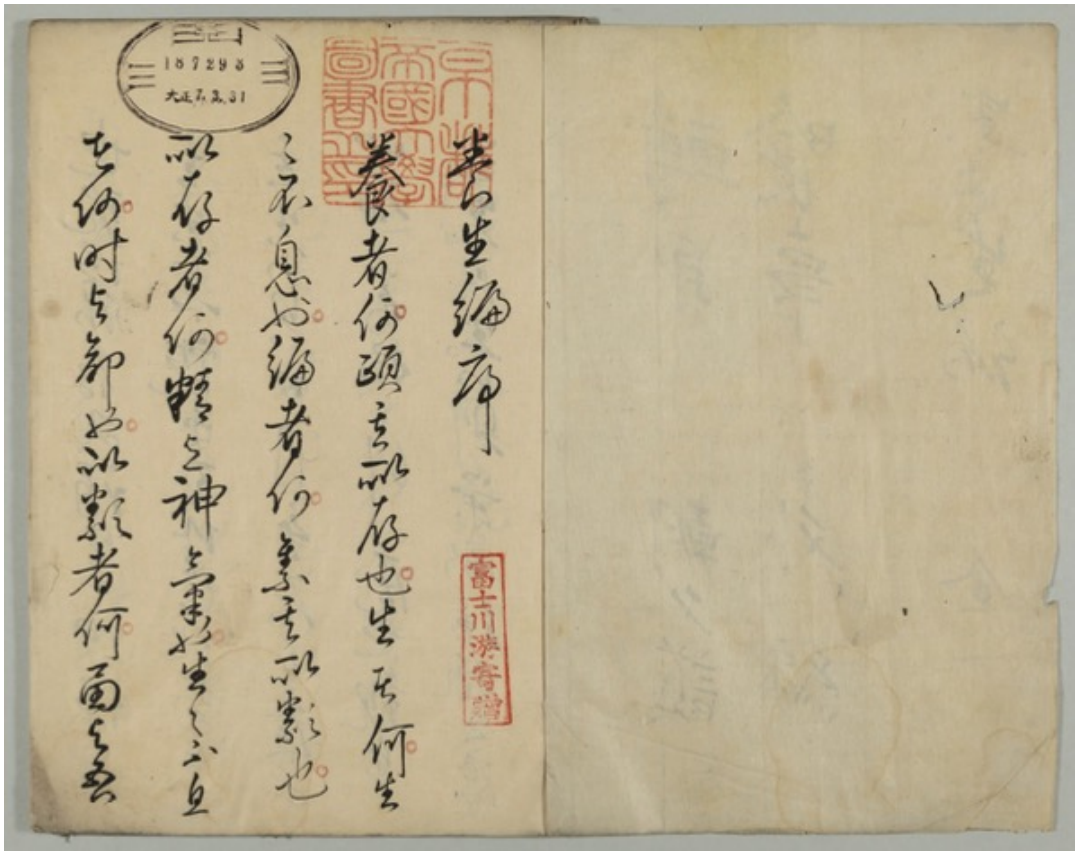
影印篇

・諸本表紙
右下から時計回りに、東本、慶本、京本の表紙を掲げた。



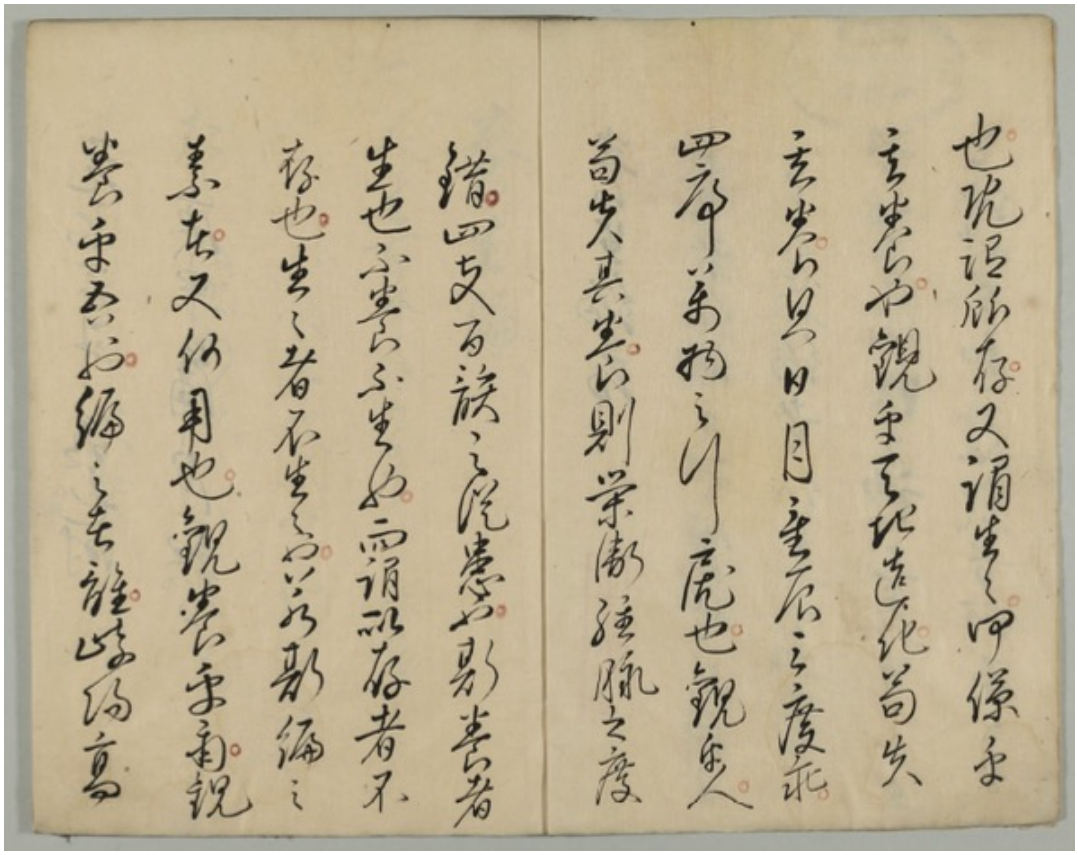


・元泰自序（京本）一丁表～二丁表

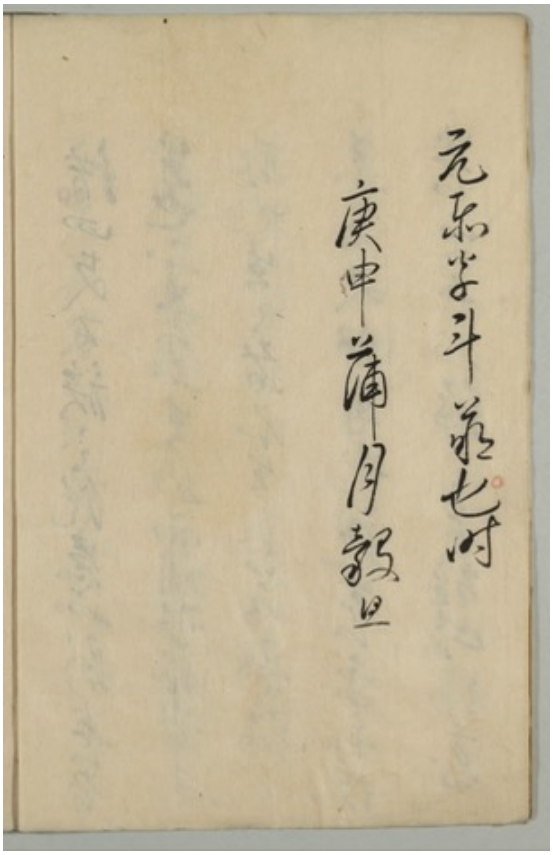


187293
大正元.2.31

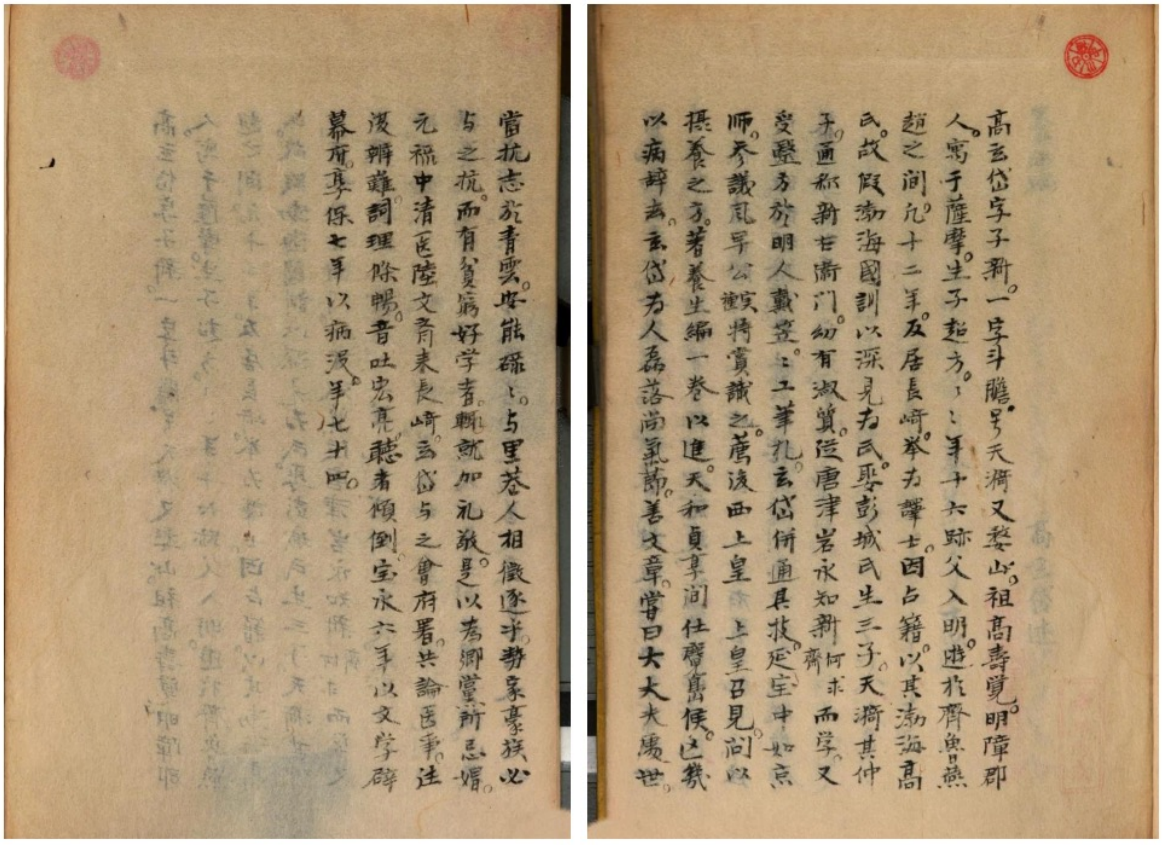
富士川滄海寄贈



・元泰自序（京本）承前　二丁裏



・慶本序文　一丁表～裏

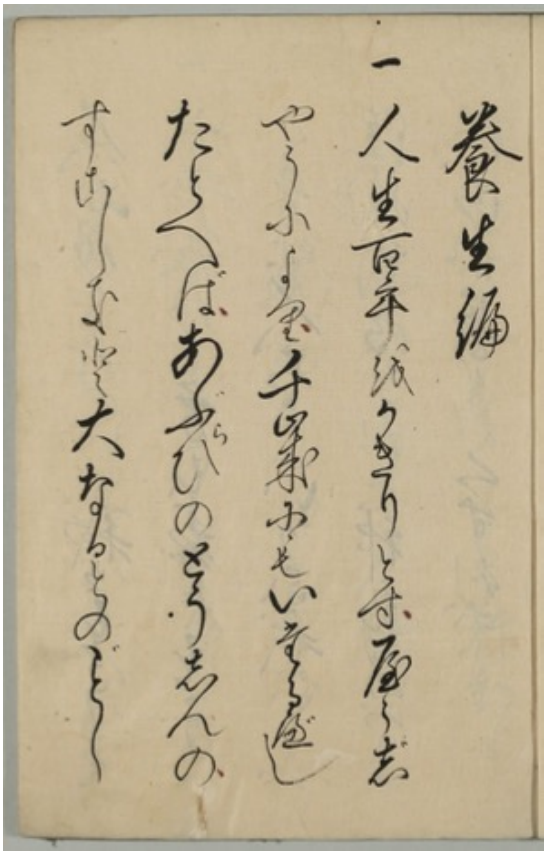


高玄岱字子新。一字斗臆。号天漪又婺山。祖高壽覺。明障郡人。寓于薩摩。生子超方。〻〻年十六跡父入明。遊於齊魯燕趙之間。凡十二年。反居長崎。挙方譯士。因占籍。以其渤海高氏。故假渤海國訓以深見方氏。娶彭城氏生三子。天漪其仲子。面称新右衛門。幼有淑質。從唐津岩永知新（何求齋）而学。又受暨方於明人戴笠。〻工筆扎。玄岱併通其技。延宝中如京師。考識見。予公（徳川綱吉）特賞識之。薦後西上皇（霊元）上皇召見。問以摂養之方。著養生編一卷以進。天和貞享間仕齊舊侯。已歳以病辞去。玄岱方人磊落尚氣節。善文章。嘗曰大丈夫處世。

嘗抗志於青雲。安能碌〻与里巷人相徴逐乎。勢豪猾必与之抗。而有貧病好学者。輒就加礼敬。是以為鄉黨所忌嫉。元禄中清医陸文斉来長崎。玄岱与之會府署。共論医事。迭汲辯難。詞理條暢。音吐宏亮。聽者傾倒。宝永六年以文学辟幕府。享保七年以病没。年七十四。

・本文三二項目（京本）

［1～3］三丁表～四丁表



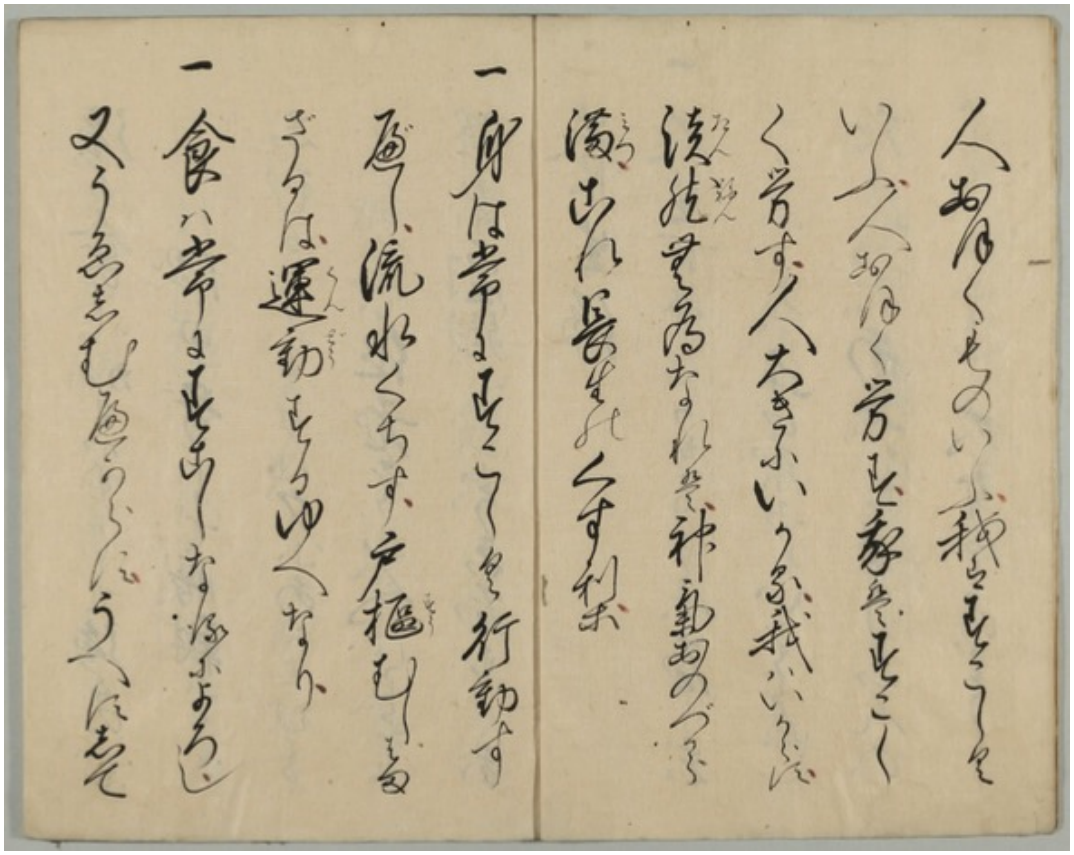
養生編

一人生百年ばかりと雖ども

やうふるまひ千日の事ゆゑ

たとへばあぶらびのごとくもんの

すはりふるがごとく大なるごとく



一人身をもつて我をもつて

いとなむ事なく労をもつて

く労す人ともいふ我いはく

法性を為なす神動のごと

濁れる長をもつて

一身は常をもつて行動す

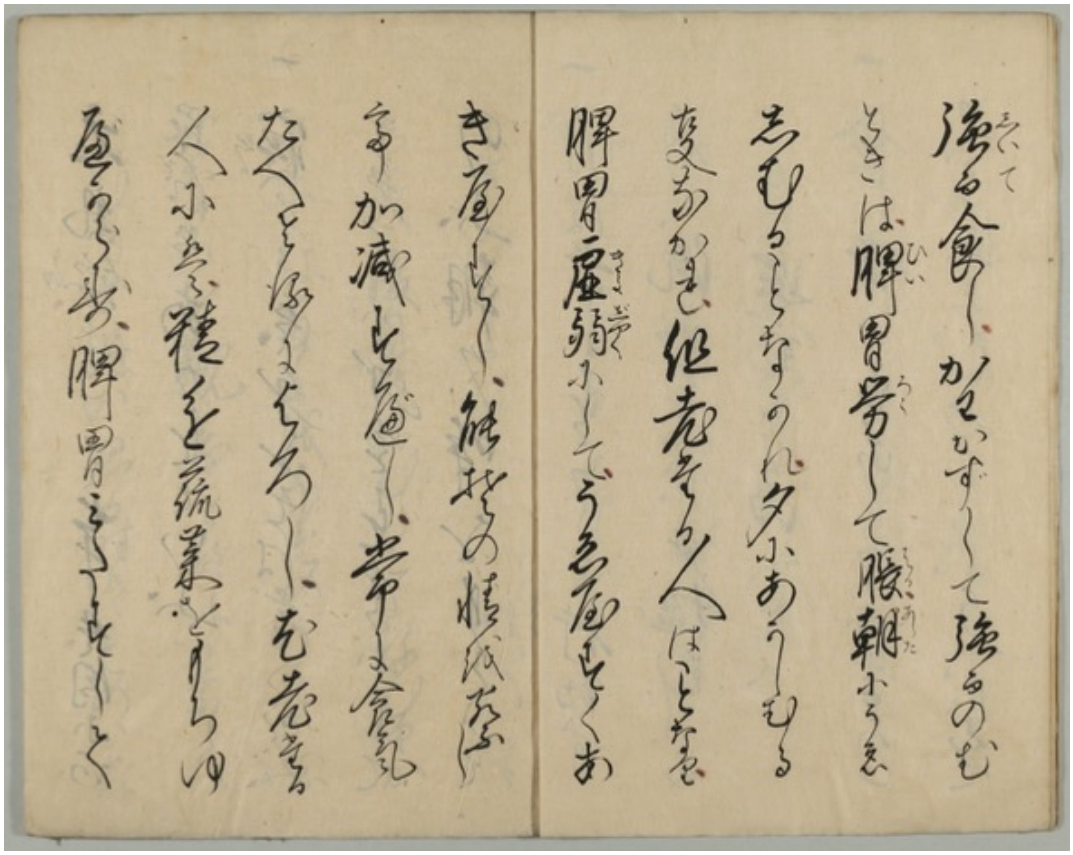
ば流水のごとし戸樞もし

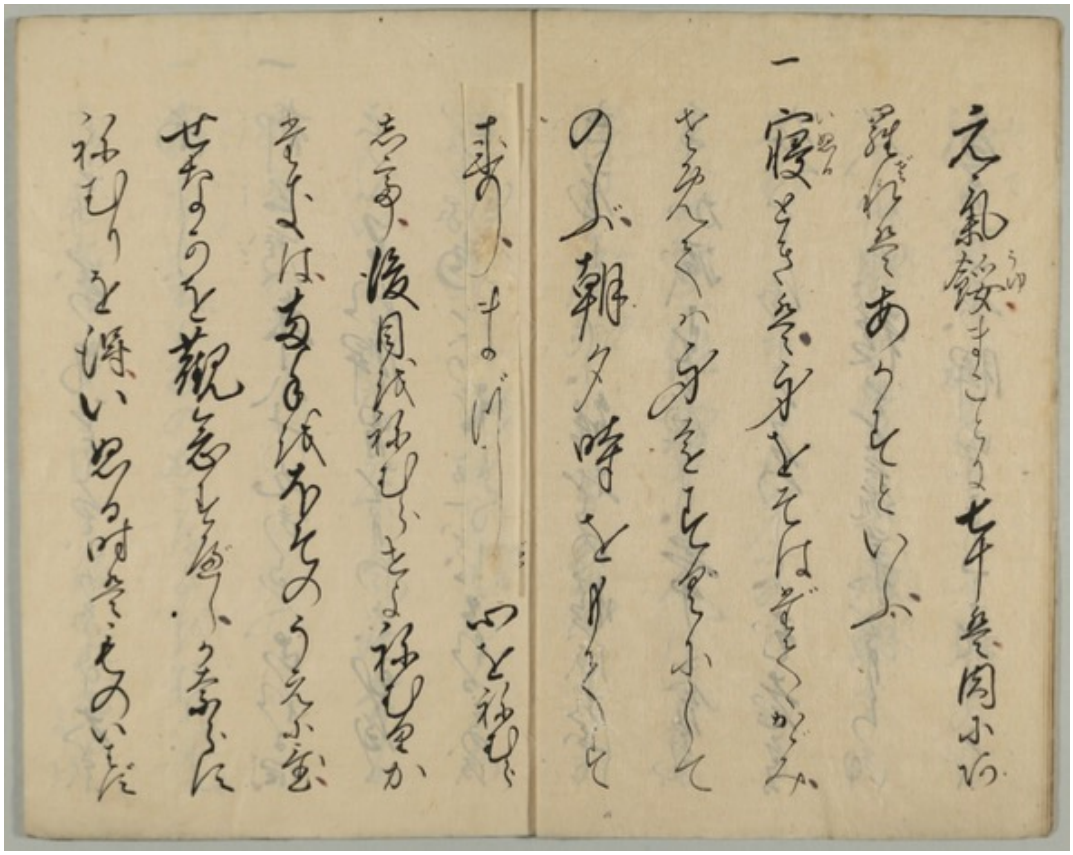
ざるは運動をゆへなり

一食は常をもつてなかばよろし

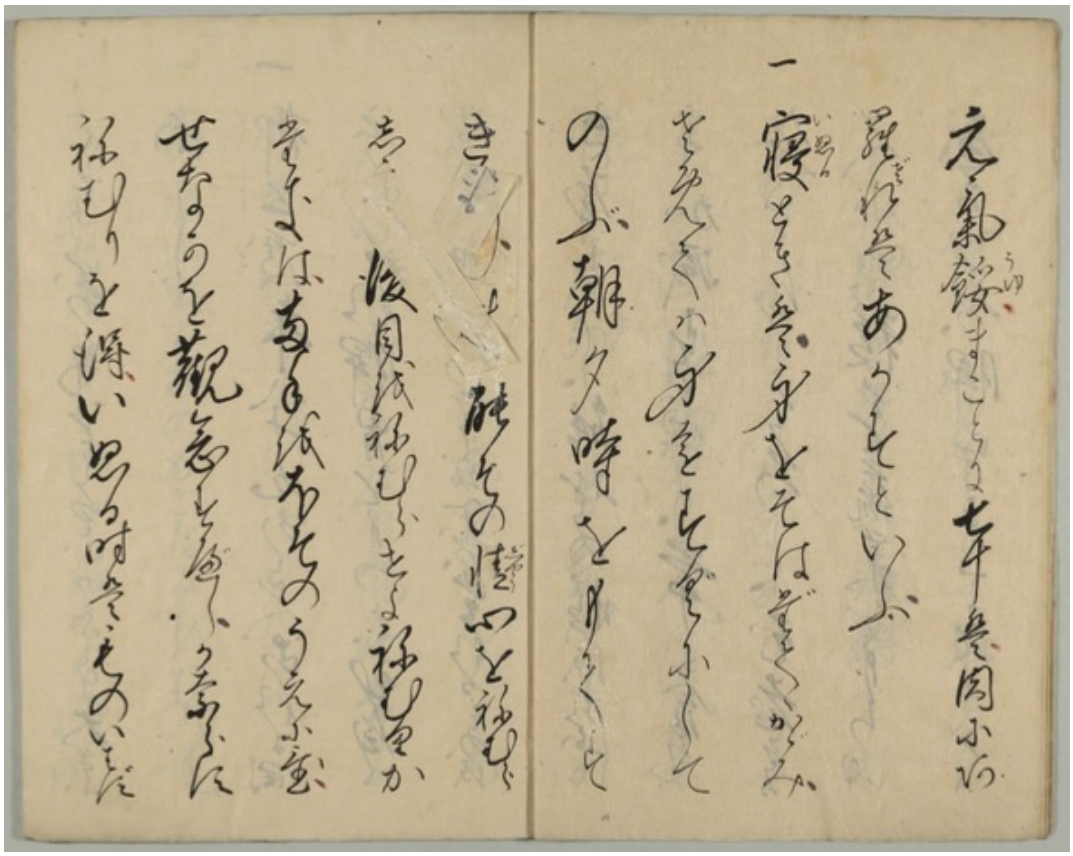
ようるもむ過ぐるべからず

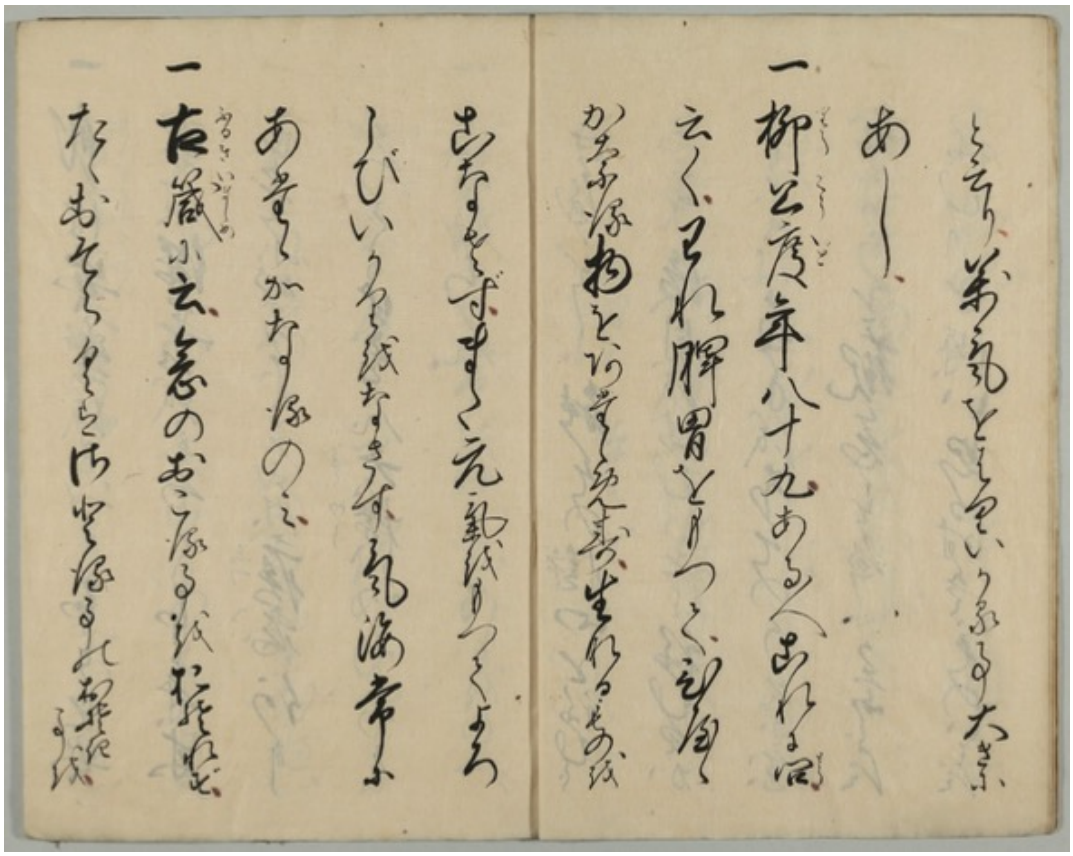
・本文三二項目（京本）承前
［3続き～4］四丁裏～六丁表



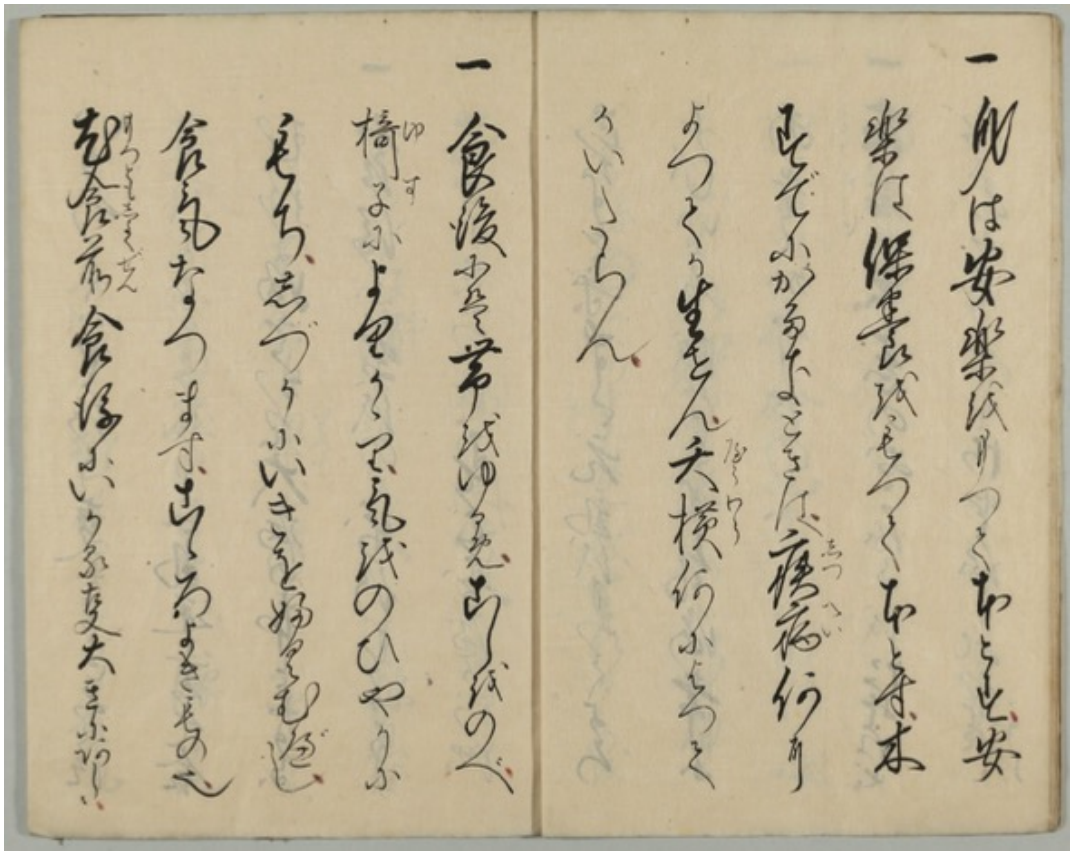


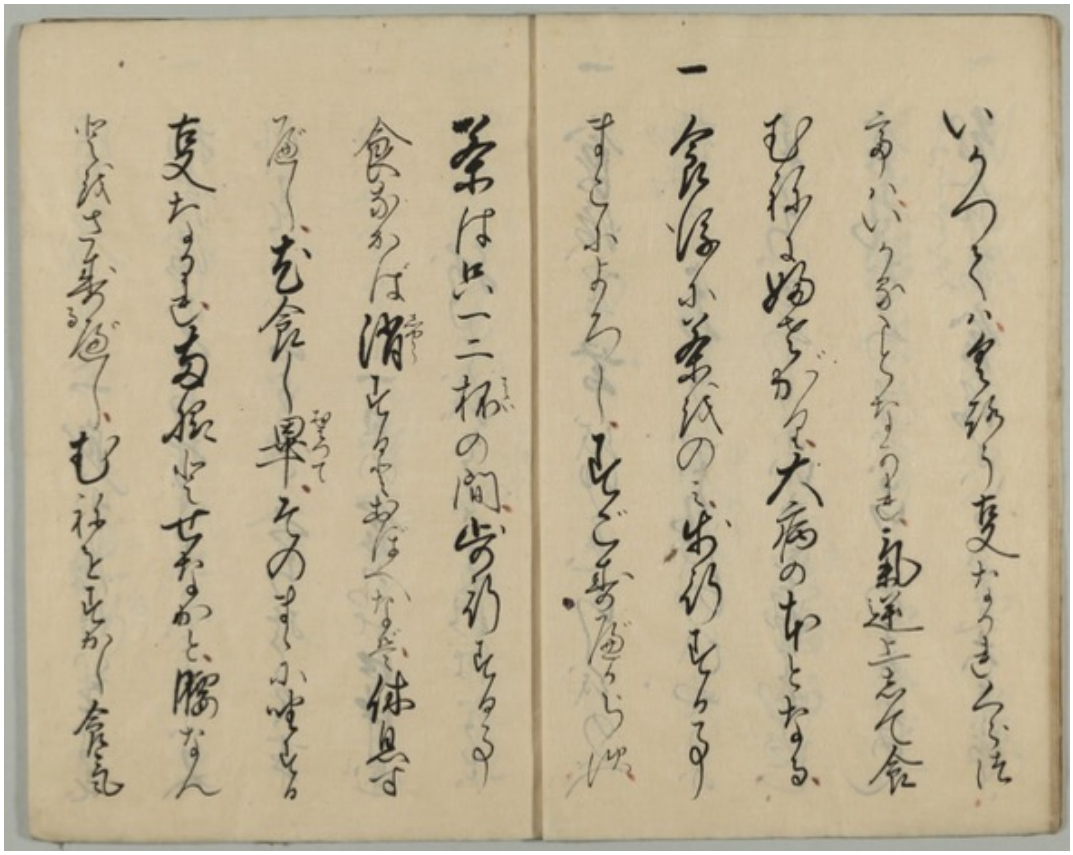
・本文三二項目（京本）承前
［4続き～6］六丁裏～八丁表



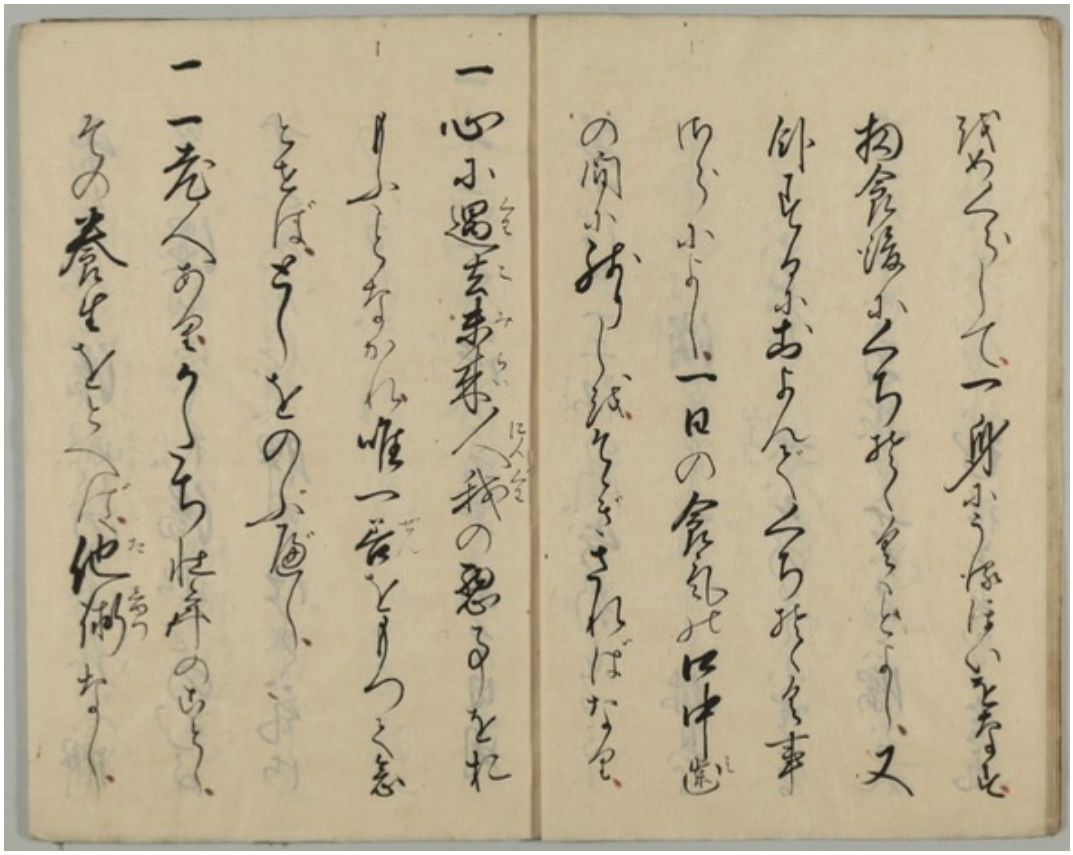


・本文三二項目（京本）承前
［7～9］八丁裏～一〇丁表

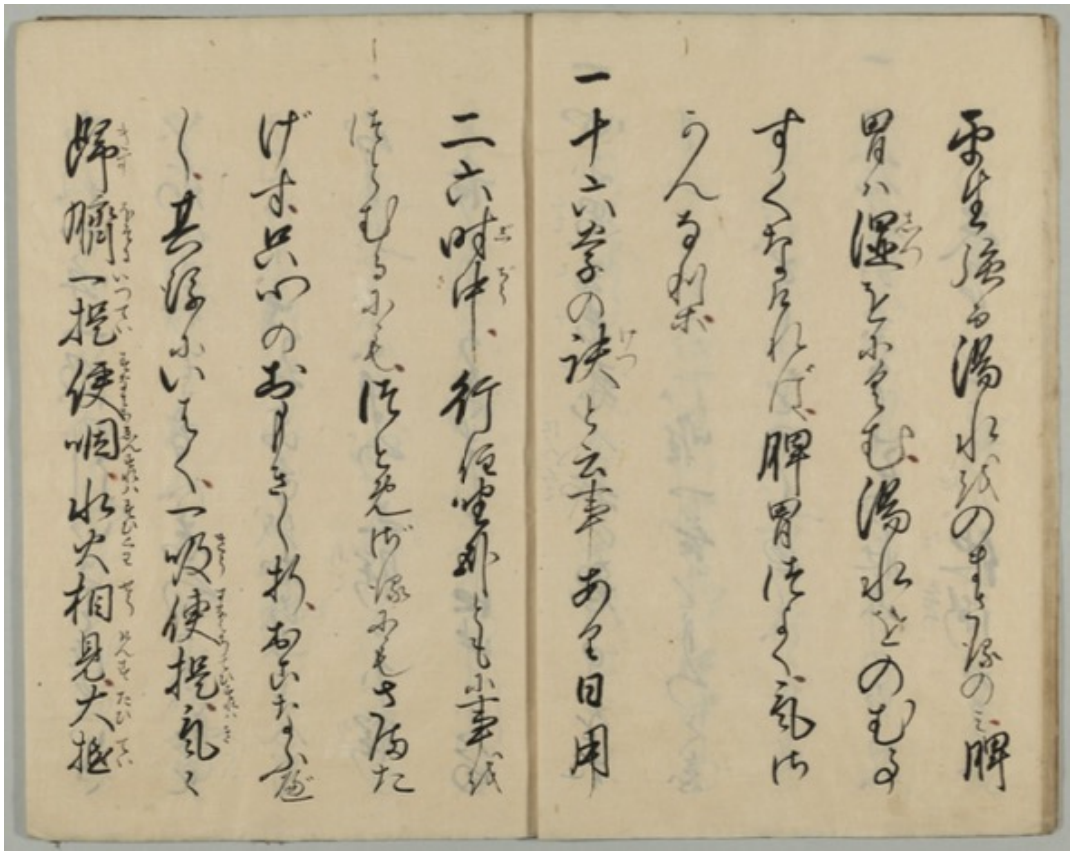




・本文三二項目（京本）承前
［9続き～12］一〇丁裏～一二丁表

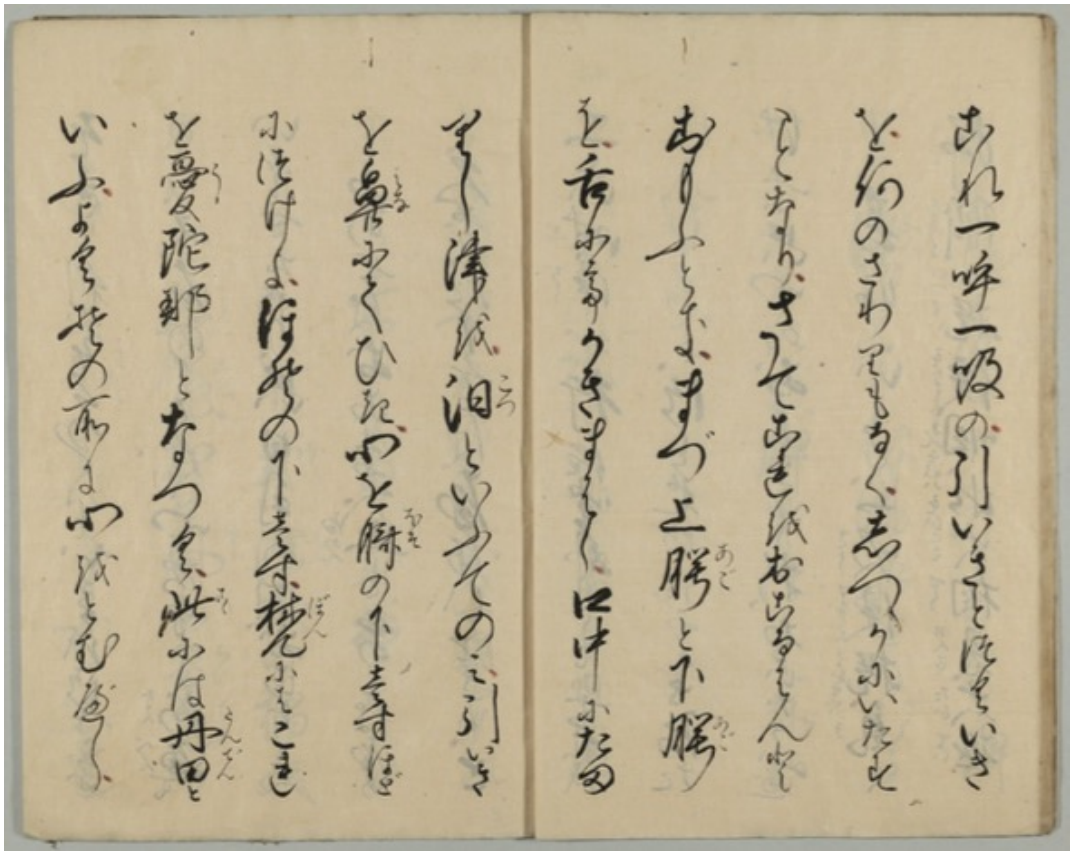


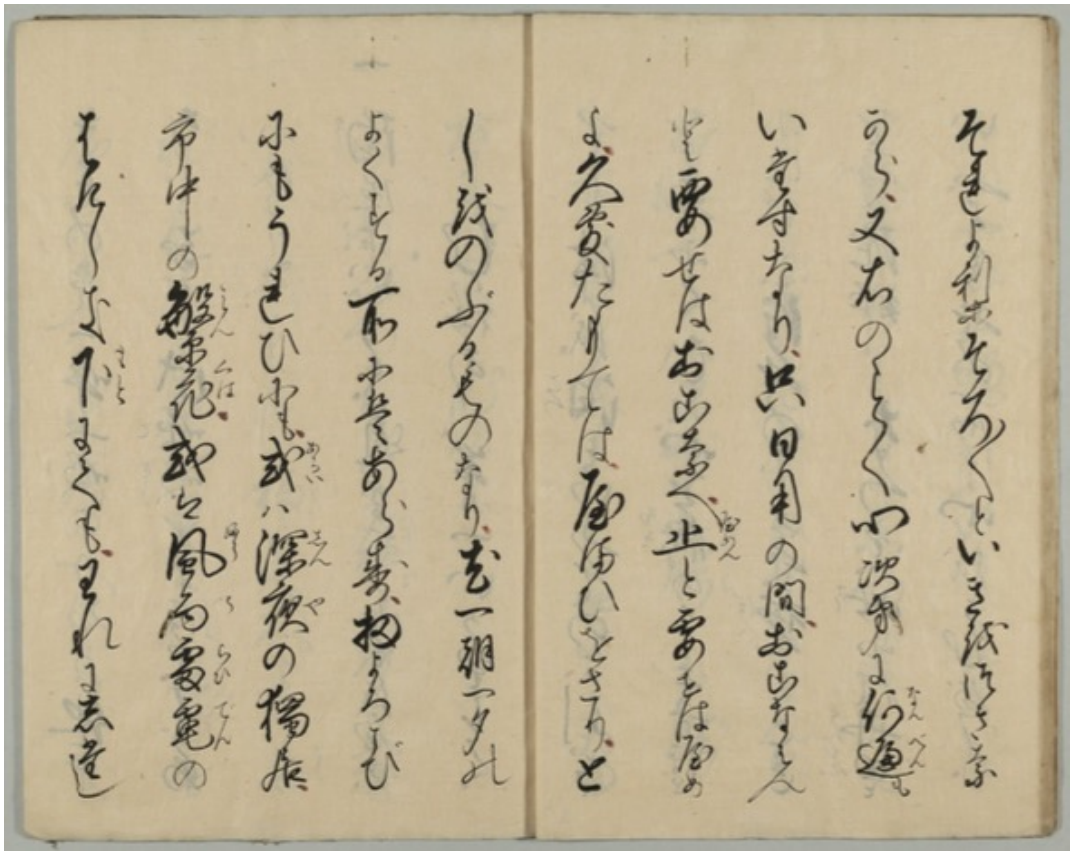
一心ふ過去来現の我の思ひをれ
ふしなすかれ唯一筋とりつく志
とをばそ〻とのぶ道〻
一一先人あるうちは世界のうち
その養をとり〻ば他働なし



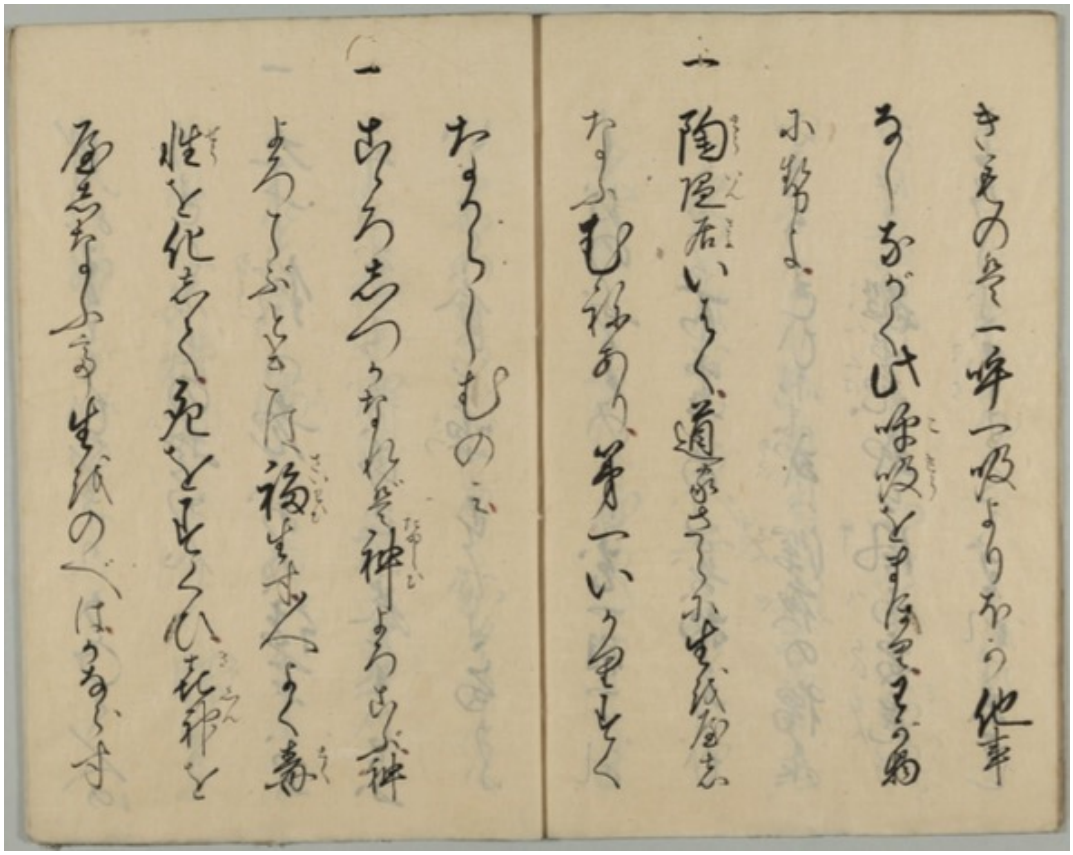
胃腸虚弱湯水紙のまうの腑
胃は湿をふせむ湯水をのむる
すくなければ脾胃はたらく気は
うんるれば
一十六条の決と云事あるを日用
二六時中行住坐臥ともに事紙
はたらもるふもはたらと見ば深みもを所た
げ求心のおりきく抜ぬなる道
く其場ふいたく一吸使提気く
歸嚮一提使間此大相見大抵

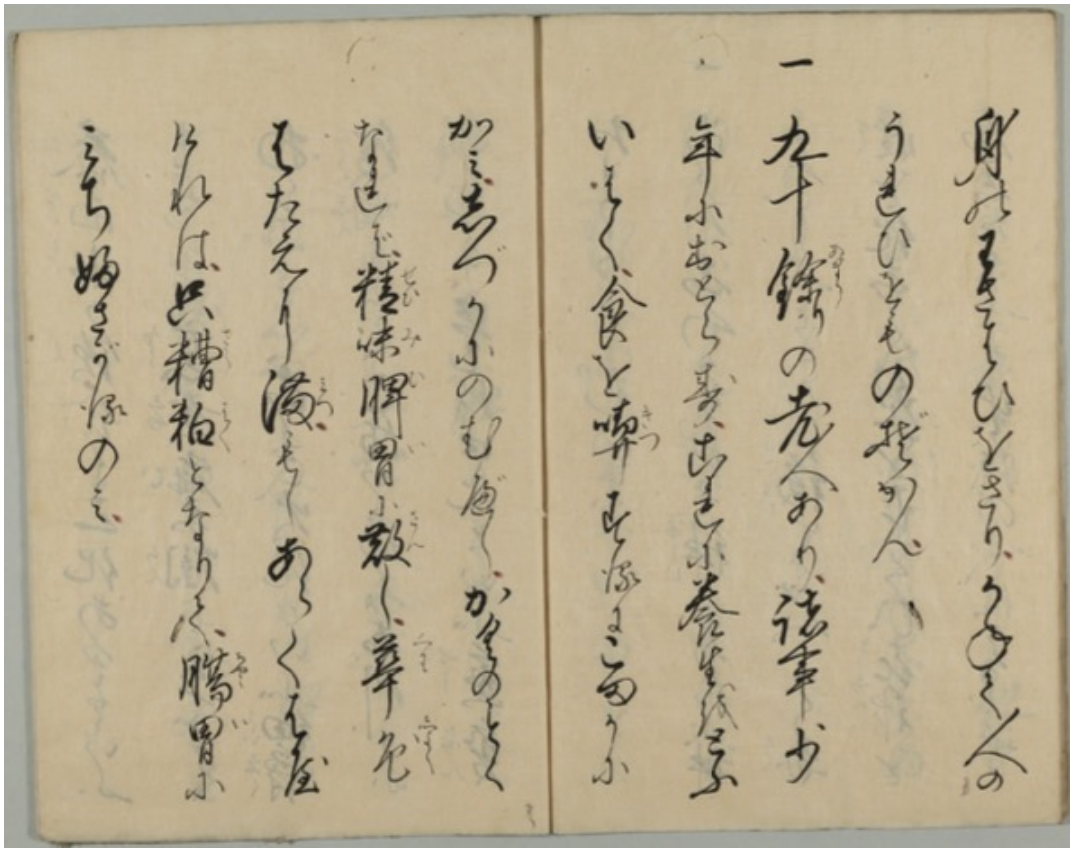
・本文三二項目（京本）承前
［12続き］一二丁裏～一四丁表



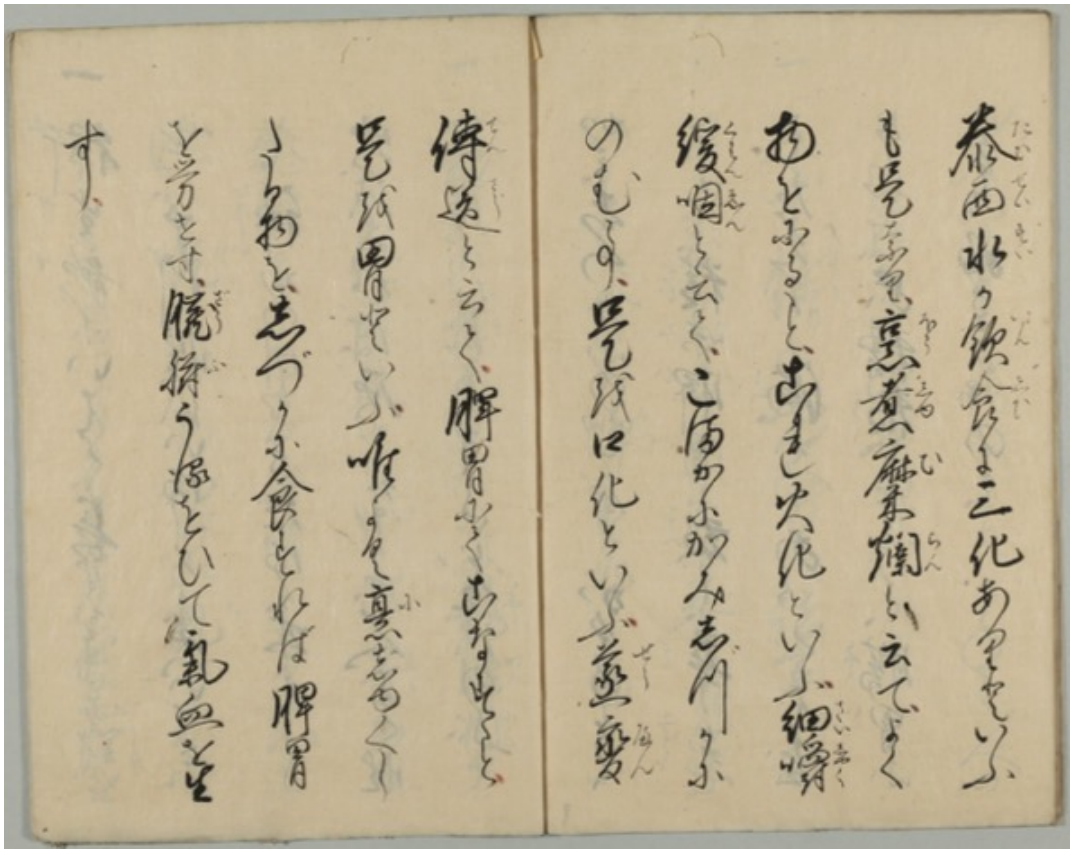


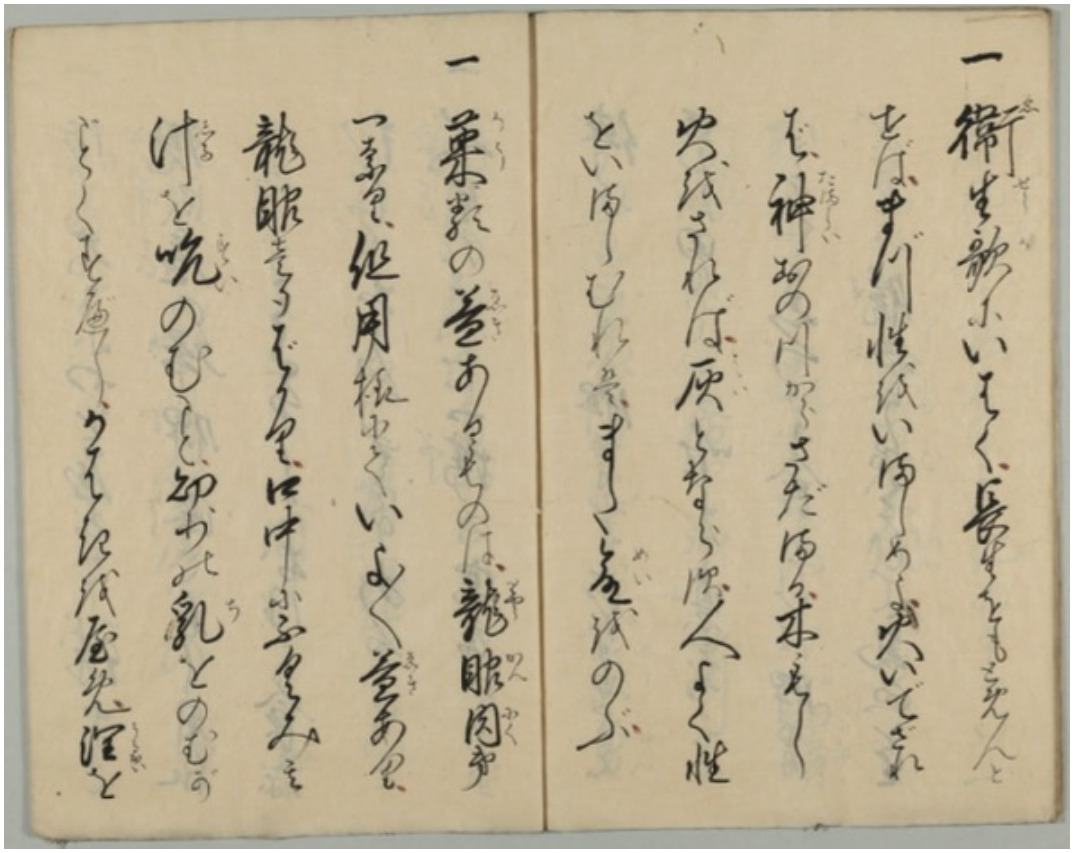
・本文三二項目（京本）承前
［12続き～15］一四丁裏～一六丁表



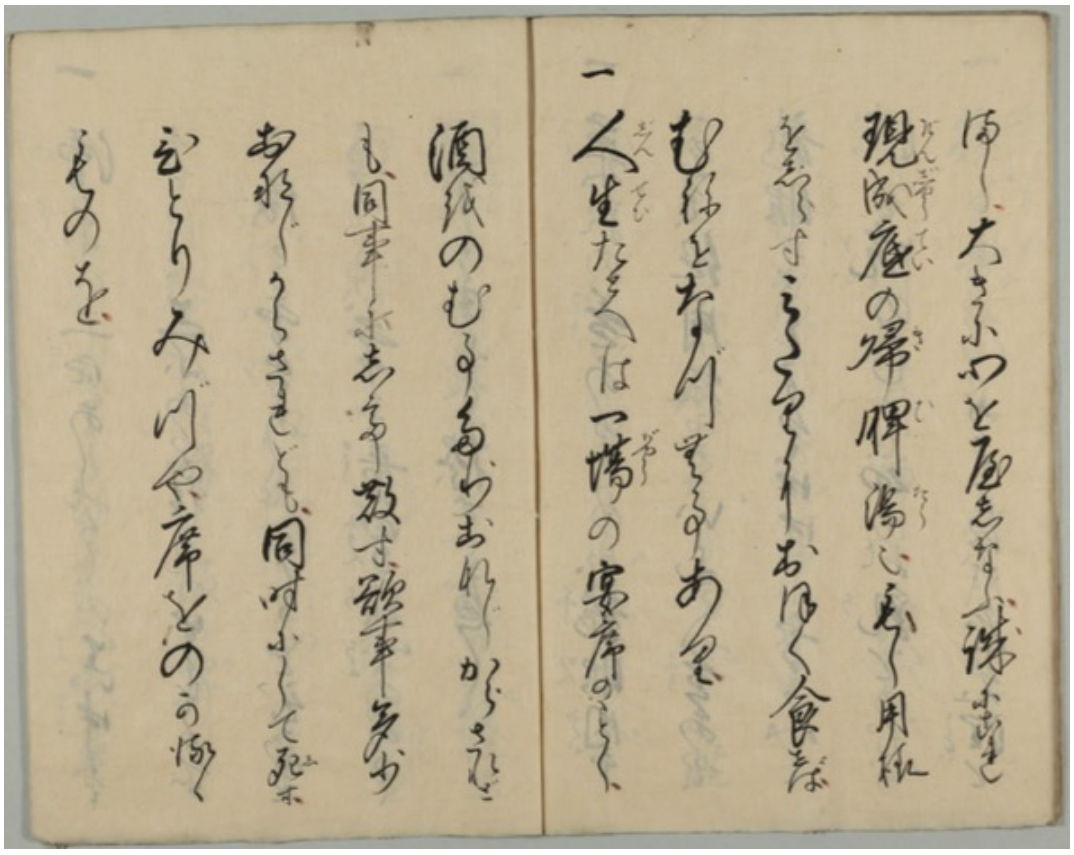


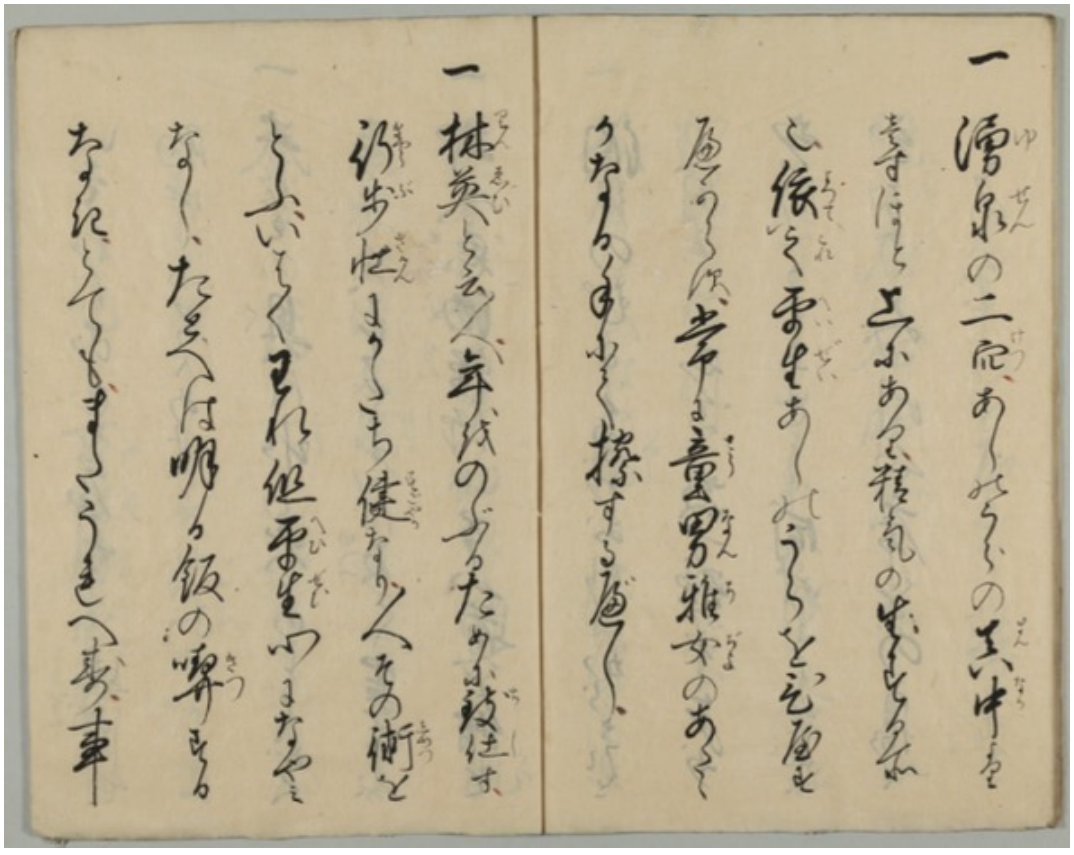
・本文三二項目（京本）承前
［15続き～17］一六丁裏～一八丁表



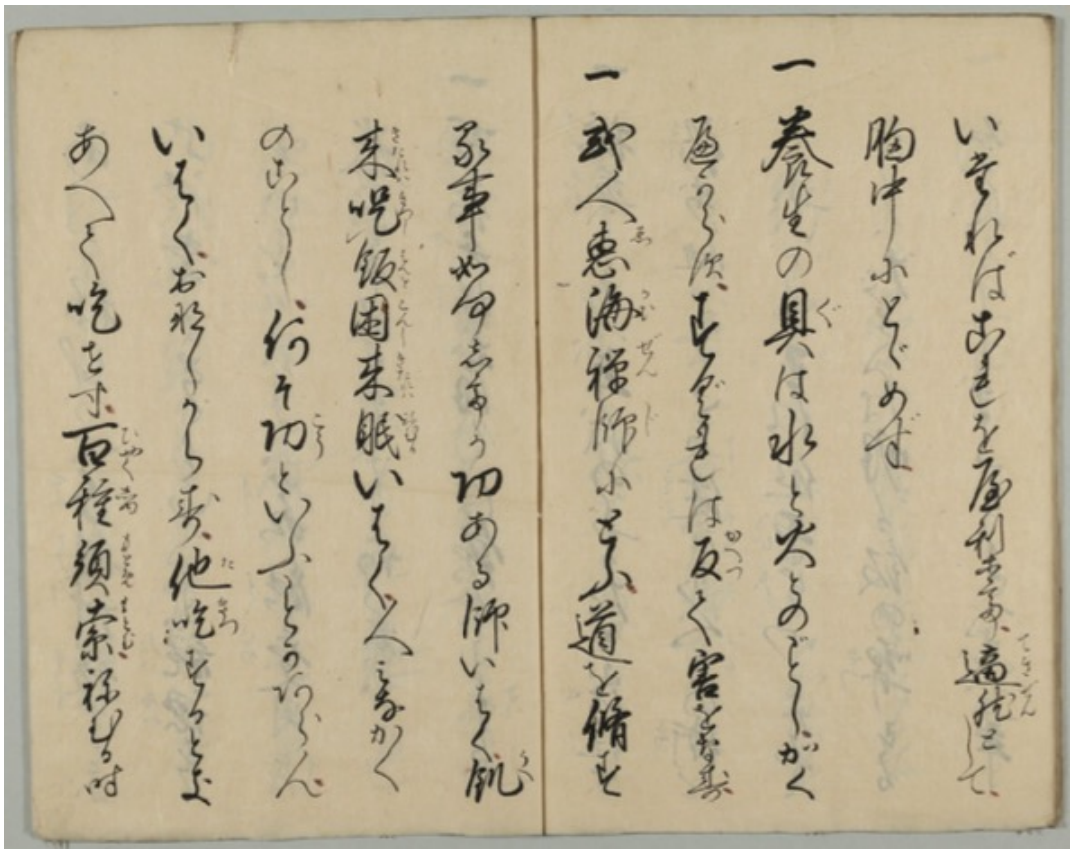


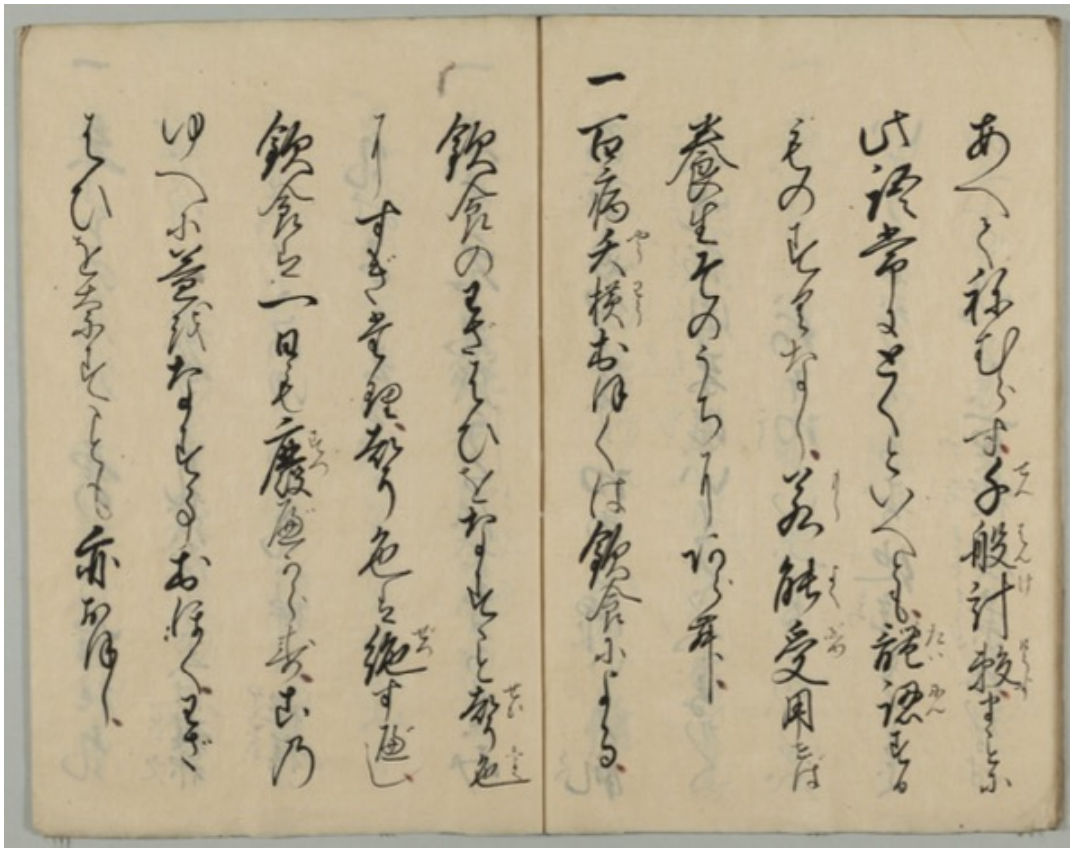
・本文三二項目（京本）承前
［17続き～20］一八丁裏～二〇丁表



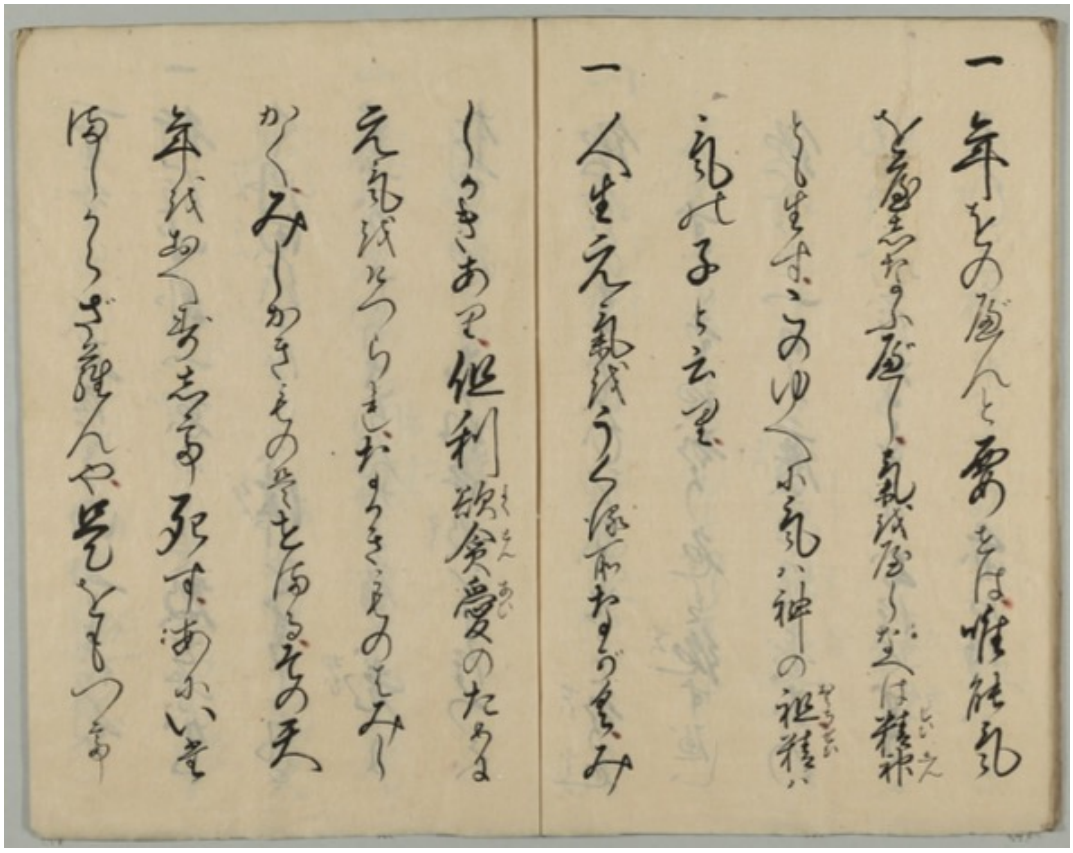


・本文三二項目（京本）承前
［20続き～23］二〇丁裏～二三丁表

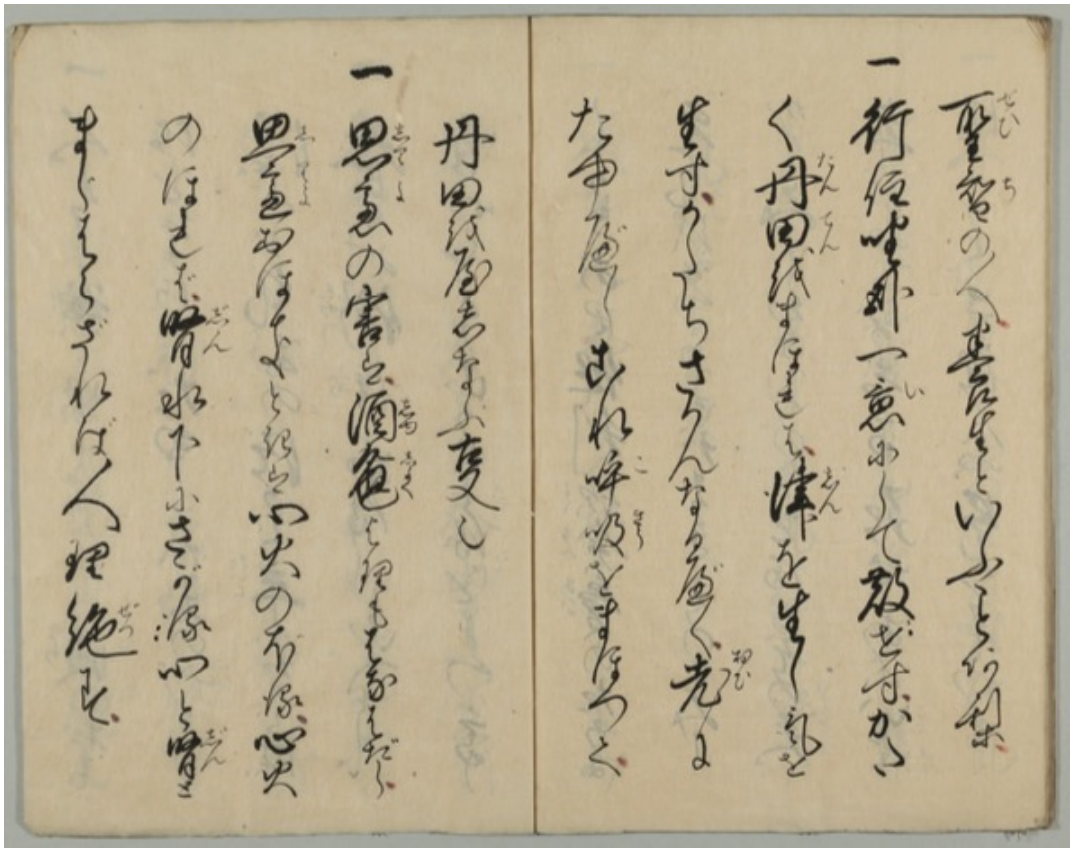




・本文三二項目（京本）承前
［24～27］二三丁裏～二四丁表

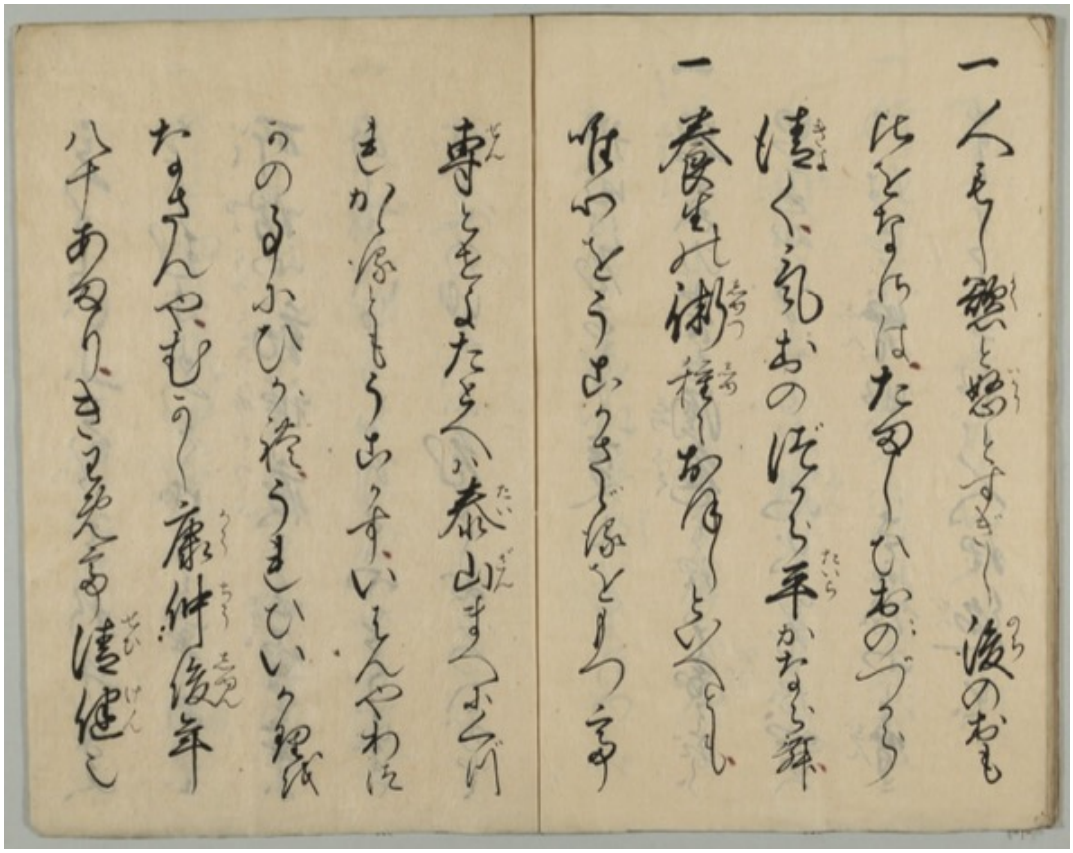


一年をの屋ん と 夢をは 性能 乳
と 屋ん なる 屋 乳 屋 なる は 精神
ともなる この ゆく ふ 乳 ハ 神の 祖精 ハ
乳 と る と 云 也
一 人生 元 乳 乳 ふ ん 屋 ん なる 屋 み
しらきあり 但利 欲貪愛 の たゆる
元 乳 乳 ゆ ら ま ん ま ま ま ま ま ま
かく みしかきの 也 を 屋 る の 天
年 乳 ゆ く 寿 を 屋 死 す あ ふ い を
屋 ゆ ら ざ 龍 ん や 見 と も つ 屋

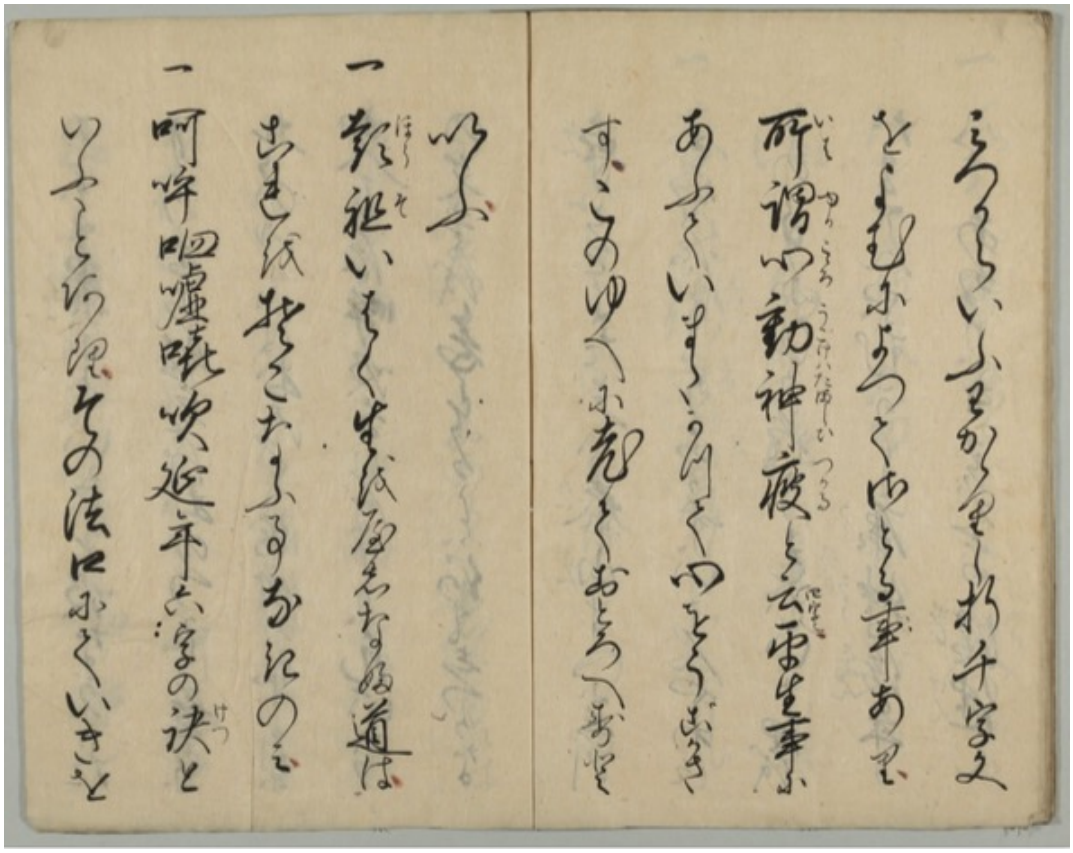


聖智の人 是 を と い ふ と の 利
一 行 住 坐 臥 一 意 ゆ し て 敬 を 示 か ら
く 丹田 乳 ま ま ま ま 津 を 生 ま 乳 を
生 ま ふ ち さ ん な る 屋 く 光 る
た 屋 屋 ま れ 呼 吸 と ま ま ま ま く
丹田 乳 屋 ま ま ふ 変 し
一 思 ま の 害 を 酒 色 ま ま ま ま ま
思 ま ま ま ま ま ま ま 心 火 の 不 ふ 心 火
の ほ ま ま 腎 水 下 ふ さ ゆ ふ 心 と 腎
ま ま ま ま ま ま ま ま ま 人 理 絶 ま

・本文三二項目（京本）承前
［28～31］二四丁裏～二六丁表

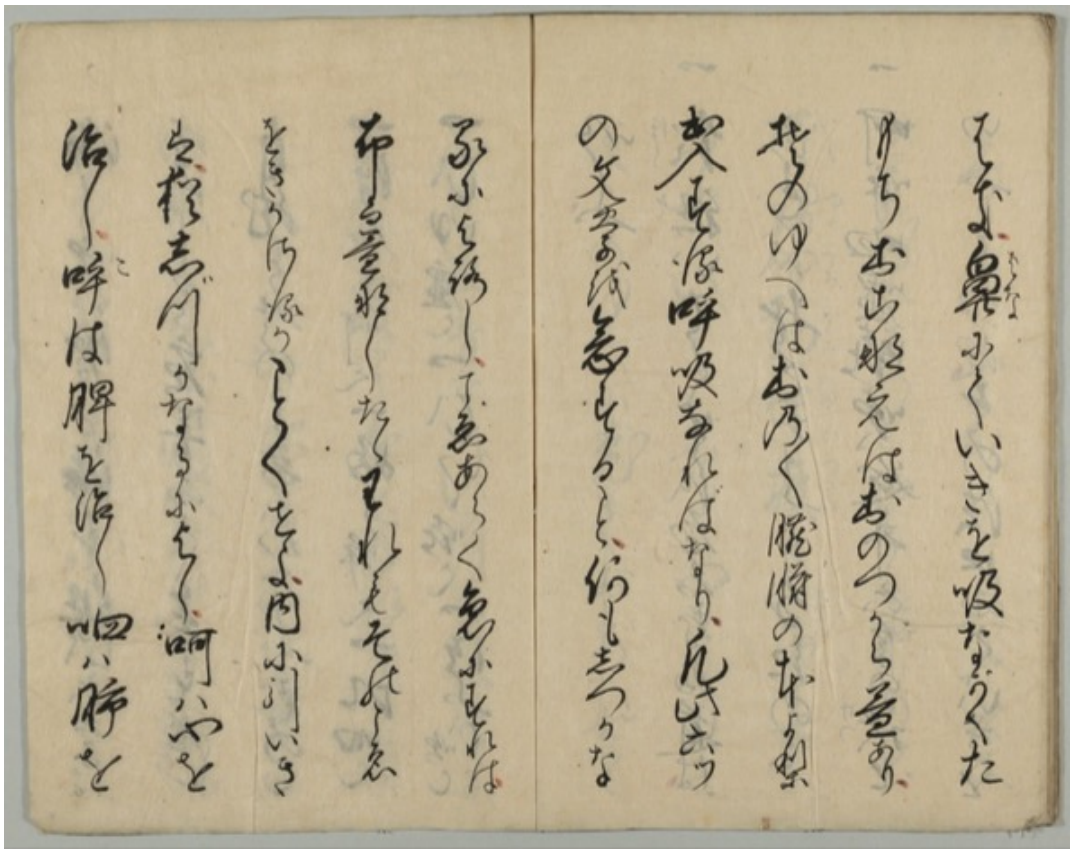


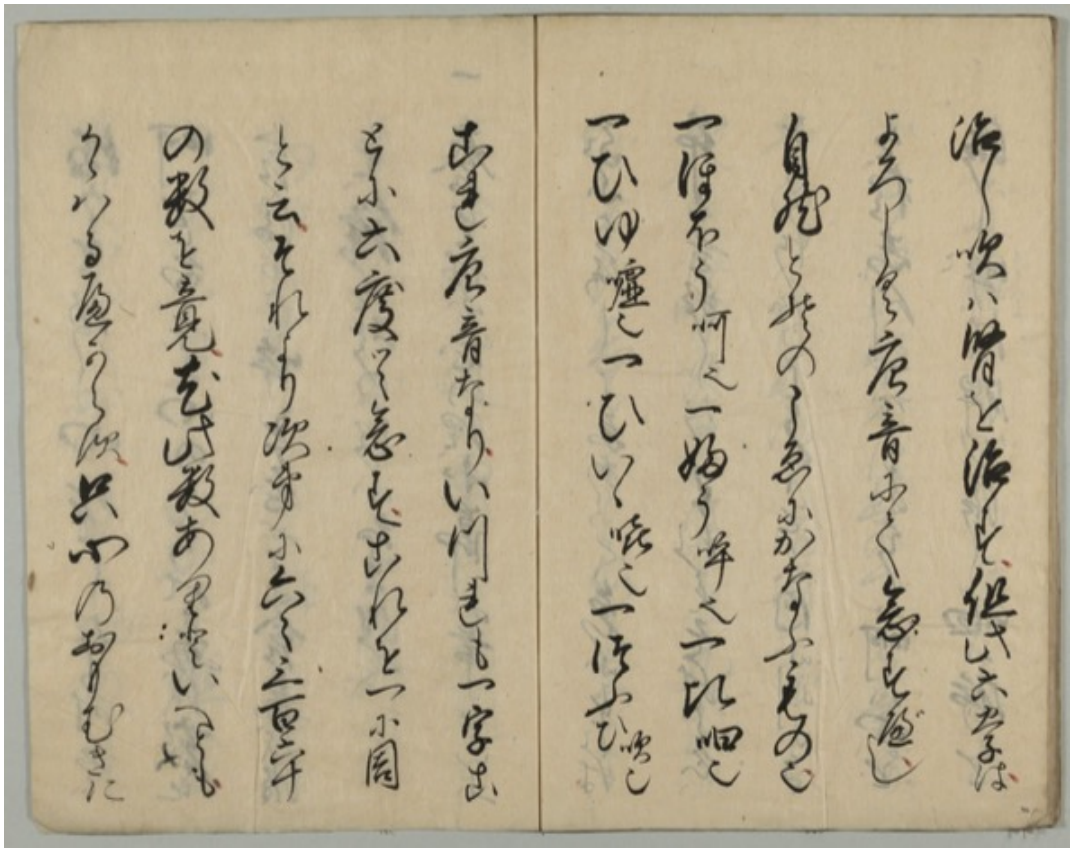
一人もゝ魔と魅とすぎゝ後のおも
ひとなりはたゞゝひおのづから
清く乳おのづから平かなる事
一養生の術種々あゝとゝも
性のとうぶつ[illegible]とりつ事
専とをよたとへば泰山まゝふべ
きかゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
のゝゝふひう[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
なきんやむゝ廉仲後年
八十あまりきゝ[illegible]清健し



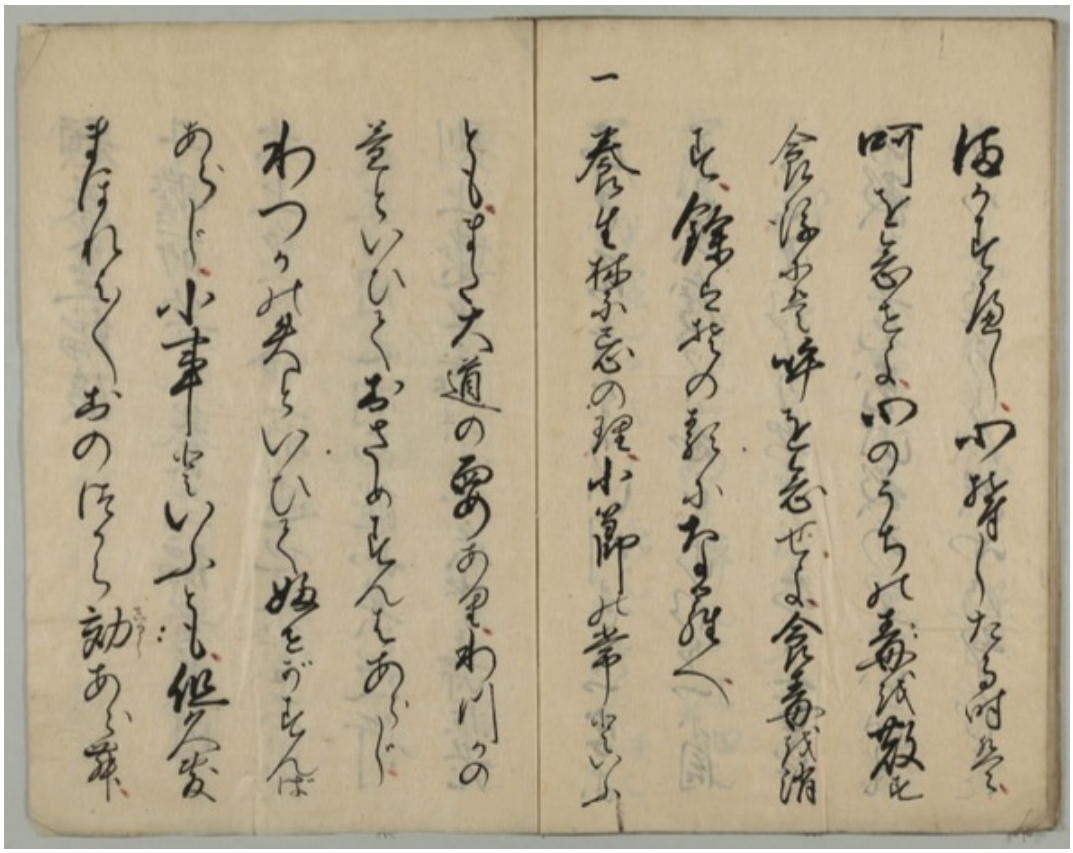
[illegible]
[illegible]
所謂心動神疲と云事[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
一
[illegible]
[illegible]
一呵吟吸嘘呼吹延年六字の訣と
[illegible]その法[illegible]

・本文三二項目（京本）承前
［31続き］二六丁裏〜二八丁表





・本文三二項目（京本）承前
［31続き～32］二八丁裏～二九丁表



・本文三二項目（京本）承前

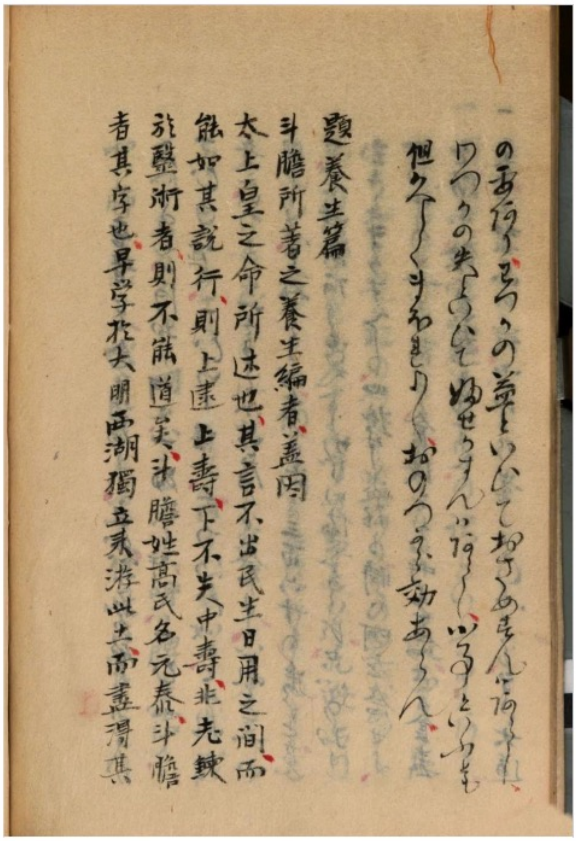
二九丁裏〜三一丁表

題養生編後

斗瞻所著之養生編者蓋因
太上皇之命所述也其言不出
民生日用之間而能如其設行
則上逮上壽下不失中壽非老
鍊於醫術者則不能道矣斗瞻姓
高氏名元泰斗瞻者其字也早
學於大明西湖獨立來遊此土而盡
得其術又遊京師探明醫能傳之
嘗與々日讀研精於三教聖

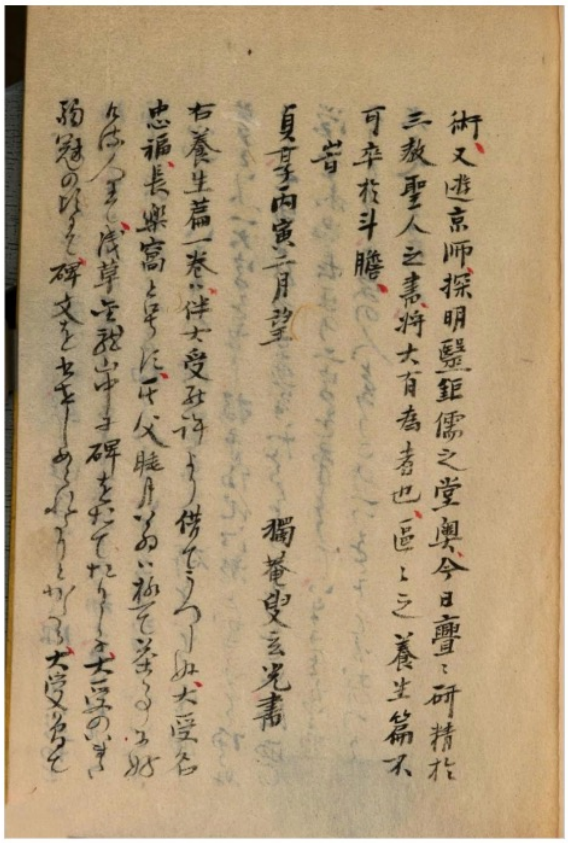
人之書將大有為者也區々之養生編
不可卒於斗瞻
肯
貞享丙寅二月望獨菴叟玄
光書

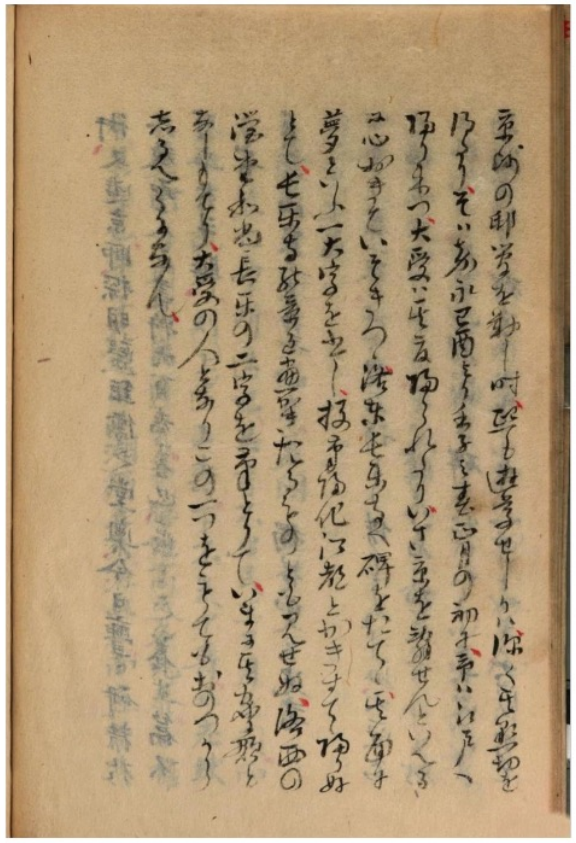
・慶本跋本　一〇丁裏～一一裏



題養生篇

斗膽所著之養生編者蓋因
太上皇之命所述也其言不出民生日用之間而
能如其說行則上逮上壽下不失中壽非老鍊
於醫術者則不能道矣斗膽姓高氏名元泰斗膽
者其字也早學於大明西湖獨立秉游此土而盡得其



術又遊京師探明醫鉅儒之堂奧今日亹亹研精於
三教聖人之書將大有裨益也區區之養生篇不
可卒於斗膽
皆
貞享四寅二月望　　獨菴叟玄光書

右養生篇一卷伴大受社許より借てうつし出大受名
忠福長樂寺と号に中父曉月公の御弟にて学るる所
久しく俳草を愛し山中に碑を立て大受の詩
弱冠の比より碑文を七年の間ふりわけ大受名を